高等学校における防災教育推進事業

令和６年度実践記録集

令和７年３月

青森県教育庁スポーツ健康課

はじめに

近年、全国的に集中豪雨による洪水災害や雪害等の発生に加え、巨大地震が発生するなど、今後も私たちがこれまでに経験したことがない自然災害の発生が危惧されます。こうした自然災害の激甚化・頻発化は、私たちの生活や社会全体に大きな影響を与えることから、学校での防災教育において、防災・減災に関する知識や技能、そして地域との連携や協力の精神を身に付けることが必要です。特に、高等学校段階では、災害発生時に主体的に地域の支援活動に参加するなど、地域社会の一員として安全な社会づくりに貢献できる「共助・公助」の育成を目的とした防災教育を実施し、その普及を図ることが必要であると考えております。

この実践記録集は、県教育委員会が令和６年度に実施した「高等学校における防災教育推進事業」における実践校９校（５団体）の取組などを紹介するものです。総合的な探究の時間や特別活動などで行われた防災教育の具体的な内容のほか、地域や関係機関との連携に関する成果や課題について、写真等を交えて分かりやすくまとめました。各実践校では、地域の災害リスクに応じて防災教育のカリキュラムを工夫し、生徒の防災・減災に関する知識や意識、行動力を育てております。

県内全ての学校において、本実践記録集を活用し、地域の災害リスクに応じた防災教育に取り組んでいただくとともに、大規模災害を想定した実践的な避難訓練や地域と連携した避難所運営訓練の手法等を参考とし、既存の避難訓練の見直しを図っていただきたいと思います。

結びに、本実践記録集の作成に当たり、御協力いただいた実践校の先生方や生徒の皆さん、そして全ての関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

青森県教育庁スポーツ健康課
課長　坂本　雄大

目　次

第１部　県教育委員会における取組

令和６年度高等学校における防災教育推進事業実施要項　１～　２
教職員視察研修　３～１０
あおもり高校生防災サミット　１１～１７

第２部　実践校における取組

青森県立青森北高等学校　１９～２８
青森県立弘前南高等学校　２９～３６
下北ＢＯＵＳＡＩネットワーク　３７～４６
※参加校
青森県立田名部高等学校　青森県立大湊高等学校
青森県立大間高等学校　青森県立むつ工業高等学校
青森県立むつ養護学校
青森県立名久井農業高等学校　４７～５６
青森県立青森工業高等学校　５７～６３

第１部

県教育委員会における取組

令和６年度　高等学校における防災教育推進事業　実施要項

１　趣旨

実践校において、自然災害発生時に地域の支援活動に参加するなど、地域社会の一員として安全な社会づくりに貢献できる「共助・公助」の育成を目的とした防災教育を実施し、その取組を県内の高等学校に普及させ、高等学校における防災教育の充実を図るものである。

２　概要

本事業は、令和６～７年度の２か年で実施することとし、実践校は年度ごとに県立高等学校から公募により６校程度選考する。

実践校においては、次の（１）、（２）を考慮した防災教育に取り組む。

（１）地域の災害リスクに応じた実践的な防災教育を行うこと。

（２）発達段階に応じた防災教育として、「共助・公助」の資質・能力の育成をねらいとした防災教育を行うこと。

なお、防災教育の実践に当たっては、既存の教育活動をベースにして行ったり、外部講師を活用したりするなど、教職員の負担増大にならないよう工夫する。

３　実践校　　９校（５団体）

・青森北高等学校　・弘前南高等学校　・名久井農業高等学校　・青森工業高等学校

・下北 BOUSAI ネットワーク（共同実践グループ５校）

田名部高等学校　　大湊高等学校　　大間高等学校

むつ工業高等学校　　むつ養護学校

４　実践校における取組

取組１　防災教育を担う教職員の資質向上に向けた取組

○実践校教職員による視察研修（計画作成：スポーツ健康課）

教職員の防災教育に係る資質向上を図るための視察研修を実施

〔主な視察先〕

①　東北大学災害科学国際研究所

②　宮城県多賀城高等学校災害科学科

③　宮城県石巻市　旧大川小学校震災遺構

取組２　実践校における防災教育の実践

（１）防災教育に係る外部講師・防災関連施設等の活用

各実践校における防災教育の専門性を高めるために外部講師や防災関連施設等を活用する。

（２）「あおもり高校生防災サミット」への参加（計画作成：スポーツ健康課）

各実践校で取り組んだ防災教育の内容について、実践校の生徒同士による発表や意見交換を行う。

（３）高校生による出前講座等の実施

取組３　実践事例の普及

○記録集の作成・配布（計画作成：スポーツ健康課）

青森県教育庁　スポーツ健康課

高等学校における防災教育推進事業費（新規）（R6～R7）

事業の目指す姿（アウトカム）

現 状 → 事 業 終 了 後 の 姿

➢ ①　気象災害の頻発化・激甚化や大規模地震の発生が危惧
◇地域の災害リスクに応じた実践的な防災教育の重要性が増大

➢ ②　発達段階に応じた系統的な防災教育の推進の必要性
◇高等学校段階では、地域の防災活動に積極的に参加し、「安全で安心な社会づくりに貢献できる」生徒の育成が目標

※県内公立学校における防災教育実施率

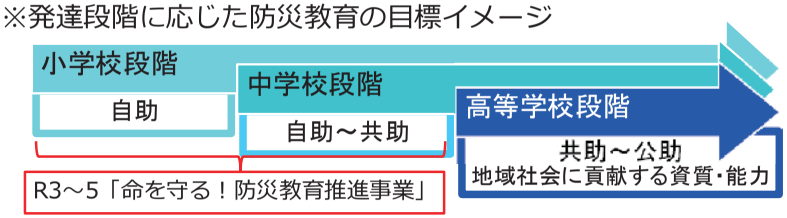
小学校（257校）	中学校（147校）	高等学校（52校）
94.2%	93.2%	80.8%（42校）

学校安全の推進に関する計画に係る取組状況調査（R4文部科学省）

自治体防災部局等と協働した避難訓練の実施校
計5校／42校中

→　高等学校での地域と協働した防災教育の推進を目指す

※発達段階に応じた防災教育の目標イメージ



→　地域の防災活動に参加し、安全な社会づくりに貢献できる人材の育成を目指す（将来的な地域防災の担い手へ）

課 題

➢ 高等学校では、安全な社会づくりに貢献できる人材を育成するための防災教育を着実に実施する必要がある。

目指す姿を実現するための取組（アウトプット）

【概要】
「共助・公助」の資質・能力の育成をねらいとした防災教育を高等学校に普及させるため、県立高等学校６校を実践校として、以下の取組を行う（R6～7、年度更新）

取組１　防災教育を担う教職員の資質向上に向けた取組

○実践校教職員による視察研修
・実践校での防災教育を推進する教職員の資質向上を図るための視察研修
・１校当たり教職員５名、宮城県内２泊３日を想定
（視察先）東北大学災害科学国際研究所、多賀城高校災害科学科、旧大川小学校震災遺構

取組２　実践校における防災教育の実践

○防災教育に係る外部講師・防災関連施設等の活用
・実践校で行う防災教育の内容に応じた外部講師の派遣（１校当たり年３回）
（講師）大学教授、日本赤十字社職員、青森県防災士会
・生徒による防災関連施設等の視察（１校当たり年２回）
（講師）地域県民局職員、建設関連企業

○「あおもり高校生防災サミット」の開催
・防災教育を通じて学習した内容や地域防災に関する課題等について、実践校の生徒同士による意見交換を行うための交流会（年１回）

○高校生による出前講座等の実施
・地域社会に貢献する資質を育成するため、実践校の生徒が防災教育の成果について発表する出前講座等
（例）地域の小中学校での出前講座、公民館・地元企業での発表

取組３　実践事例の普及

○記録集の作成・配布
・実践校の取組を他の高等学校へ普及させるための記録集を作成し、全ての高等学校に配布（R6～7）

教職員視察研修

本事業では、実践校での防災教育を推進する教職員の資質向上を図ることを目的に、宮城県の先進的な防災教育を行っている高等学校や大学のほか、震災により大きな被害を受けた地域や震災遺構の視察研修を行った。

日程：令和６年１０月１７日（木）～１９日（土）

１０月１７日（木）

訪問先：東北大学災害科学国際研究所

〇講義　「『みやぎ防災ジュニアリーダー』から顔の見える地域防災リーダーへの展開」

講師　東北大学災害科学国際研究所　佐藤　健　教授

宮城県教育委員会では、地域防災活動の担い手である高校生「みやぎ防災ジュニアリーダー」の育成に取り組んでおり、高校生と地域が協働した防災活動を継続していくことで、次世代の人々が住み続けられる地域となることが期待されている。また、顔の見える地域防災活動の中心的な役割を担う人材であり、地域防災を次世代へとつなぐことを使命として町内会や学校での防災活動を行う「仙台市地域防災リーダー（SBL）」の事例を紹介していただいた。

さらに、コミュニティ・スクールの仕組みを活用した取組として、横浜市立北綱島小学校の事例が紹介された。同校では、専門家から指導を受けた地域住民が体験活動の運営や防災訓練を主導するほか、中・高校生が小学生に対して講義等を行うなど、持続可能な地域防災の可能性を見出せる好事例となっている。

佐藤教授からは、地域と学校との連携が上手くいっている地域では、以前から良い人間関係が構築されており、楽しみながら防災について学んでいることから、ぜひ地域の実情に応じ、できることから始めてほしいとのメッセージをいただいた。

参加した先生方より

- 宮城県における全体的な防災教育の関心の高さが伺えた。防災教育を行うのではなく、日頃の授業や、街づくりの中に防災を取り入れるという視点が特に勉強になった。学校、行政、住んでいる人々が一体となって取り組める防災教育の在り方を模索していきたい。
- 東日本大震災よりも前から、宮城県や仙台市は防災に対する意識が高く、取組がとても進んでいると感じた。みやぎ防災ジュニアリーダーや防災指導員の育成の取組が、次世代の人材を育むことにも繋がっている。地域住民と高校生が一緒になって行う活動は本校でも参考にしたい。地域防災は一人のスペシャリスト頼みでは立ち行かない。各地域に防災リーダーがいることが重要だと知った。
- 学校にいるこどもたちを災害から守ることを考えたとき、地域との連携が不可欠であることから、学校も地域も一緒になってこどもたちを守るという認識が重要であると感じた。学校と地域との連携体制を構築するためには、外圧的な義務感ではなく、連携・協働が楽しいという内発的な取組となることが望ましいことを学んだ。

〇講義　「情報爆発時代における災害との向き合い方」

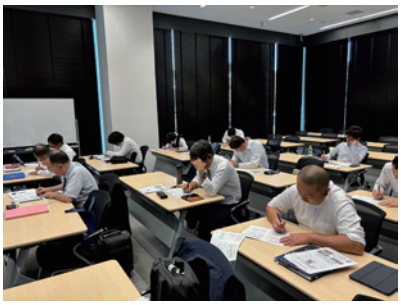
講師　東北大学災害科学国際研究所　佐藤　翔輔　准教授

佐藤准教授の研究によると、災害時にSNSで流れている有用な情報はごくわずかであることから、本当に大事な情報を取捨選択するには高校生の情報リテラシーを高める必要があること、自治体から出される発令は間に合わない・適切でない可能性を考慮した情報判断に関する訓練も必要であることが示唆された。

〇講義　「災害における当事者意識を高める」

講師　東北大学災害科学国際研究所　佐藤　翔輔　准教授

災害当事者となる個人が考える防災・減災行動は、直接命を守る効果のあるリスク回避の行動は少ない状況にあるため、防災・減災行動の効果とイメージのギャップを理解することで命を守る可能性の高い行動となるよう期待したいという話があった。また、災害があったことを学ぶ際には、実際に体験した人から災害事例を聞くことが長期的な記憶に一番効果があること、被災時に臨機応変な行動ができるためには、日頃から災害発生時の行動について選択肢を作っておくことが重要であることなど、具体的な事例を基に説明していただいた。



参加した先生方より

- 私自身はXやFacebookを利用していないので、SNSのデマ情報などにあまり関心がなかったが、今回の講演を聴き、高校生などの若い世代のほとんどはSNSで情報収集をしていると気付き、他人事ではないと感じた。実際に佐藤准教授がデータを調べて講演をされていて、内容にも説得力があった。後半の当事者意識に関する内容では防災・減災に関する効果とイメージのギャップに気付かされた。まず、自分達でできることだけでも準備をしておきたい。
- 正しい情報を選択するスキル、不必要な情報は発信しないといった日頃からの情報の取扱い方は混乱が予想される災害時にはさらに重要であると感じた。情報の取扱い方のマナーやモラルを取り上げた授業を展開しているが、平時のみならず緊急時の取扱い方の注意点も伝えていくべきだと感じた。
- 災害発生直後の情報については、緊急性や重篤度など様々な側面から評価することが重要であることを学んだ。また、発信側・受信側双方に高い情報リテラシーが求められることから、日頃からの情報の取扱いに関する指導や防災教育において、災害発生時における情報との向き合い方についてもこどもたちに考えさせることが必要であると感じた。

１０月１８日（金）

訪問先：多賀城市役所

〇講話　多賀城市総務部危機管理課防災減災係

多賀城市は、東日本大震災において唯一「都市型津波」に襲われた地域とされ、多くの犠牲者が出たほか、市の約半数の住戸が損壊し、甚大な被害を受けた。震災後は、幹線道路をつなぐ災害時避難道路、災害用備蓄品を保管する防災拠点施設等のインフラ整備のほか、市内全域で実施する総合防災訓練の実施や防災情報アプリ「多賀城防災」、災害用備蓄品管理システムの導入など、ソフト面での防災・減災の取組にも力を入れている。

また、多賀城市では震災の記録をデータベース化した「たがじょう見聞憶（けんぶんおく）」を平成26年から運用しており、震災を風化させることなく記録と体験、教訓を地域の未来のために残し、「減災都市」を目指す取組を実施している。この運用に当たっては、授業で「たがじょう見聞憶」を活用している県立多賀城高校と毎年意見交換を行っており、多賀城市と高校が連携しながら、更なる防災・減災の取組の拡大を図っている。

参加した先生方より

- 多賀城市を襲った都市型津波というものを初めて知った。自分の住む街について理解し、どのようなことが想定されるのかを知っておく必要がある。避難所運営も実際に携わった方から聞くことで、報道などではわからない部分を知ることができた。また、復興への取組もソフト・ハードの両面から様々行われていて、今もまたアップデートされていた。記録を残して後世に伝えること、総合防災訓練などで、互いに顔の見える関係を築いていくことが大切だと感じた。
- 実際に避難所で生活していた人の経験談や、運営した職員のリアルな話が参考になった。また、復興を見据えた民間との連携が考えられていた。発災時の動きが注目されがちであるが、いかに早く復興するかについて考えることも重要である。地域と公共機関のそれぞれがなせる役割について審議・共有することにより、誰も取り残さず復興につながると考える。また、教育機関としての学校と、災害時避難所として受け入れる学校、生徒・避難者が互いに悪い影響が出ないようにするすり合わせについても考えていきたい。
- 災害時に避難所で発生した感染症の問題などは現代でも考えられることなので対策を考えておきたい。復興へ向けたスピード感はいかに近所での協力体制が整っているかが重要であると伺ったので、日頃からの人付き合いを大切にする地域にしていきたいと感じた。

訪問先：宮城県多賀城高等学校

〇授業見学　「くらしと安全Ａ」（災害科学科２年７組）

学校設定科目「くらしと安全Ａ」は、一般的な保健の教科書をベースに、多賀城高等学校の教員が「災害」に関連する内容を盛り込んで作成したオリジナルの教科書を用いて授業を行っていた。

本時の学習内容は「精神疾患への対処」「災害時の心のケア」となっており、一般的な保健の教科書で取り扱う内容よりも災害に特化したものになっていた。ワークシートでは、「日常」と「災害時」に分けて学習するようになっており、災害時にはどのように行動すべきか、これまでの学習内容を踏まえて考える内容となっていた。

授業では、予想→知識・理解→個人分析→グループワーク→発表・共有→振り返りの流れで学習活動が組まれており、特にグループ学習の時間では活発に意見交換している様子が見られた。生徒たちは、これまでの学習で得た知識を関連付けながら、しっかりと自分の意見をもって学習に取り組み、他者との意見交換で自身の考えを深化させており、まさに「主体的・対話的で深い学び」が体現されている授業であった。

〇災害科学科の取組紹介　多賀城高校　佐々木教頭

災害科学科は、宮城県の平成28年４月に設置され、平成30年度からはSSH指定校として様々な科学的アプローチから災害を学び、人の命とくらしを守る人材の育成を目指している。

災害科学科は、他教科と融合させたクロスカリキュラムによる災害の学習が特徴であり、正規の学習内容を圧縮して災害関連の内容を盛り込んだオリジナルの教科書を作成している。また、フィールドワークや外部講師を活用した授業を多く取り入れているほか、「『世界津波の日』高校生サミット」や「防災推進国民大会（ぼうさいこくたい）」など、数々の大会への出場や各方面での発表を行っている。さらに、同校主催の「東日本大震災メモリアルday」は、毎年全国から20以上の学校が参加し、生徒が防災に関するポスターセッションを行い、各地の高校生が相互の研究発表を通して防災に関する理解を深めている。（「東日本大震災メモリアルday2023」には、大湊高校と八戸中央高校が参加している。）

多賀城高等学校の施設

iRis Hall

東日本大震災旧仮設住宅

○校外活動　災害科学科生徒による「津波伝承まち歩き」

災害科学科生徒による震災伝承活動の一つとして実施している「津波伝承まち歩き」を体験させていただいた。

生徒たちは、自分たちで作成したオリジナルのマップを基に、津波の爪痕が残る各ポイントを歩いて回りながら津波で町が受けた被害について説明してくれた。時折、タブレット端末で当時の津波の映像を流して参加者にも被害の甚大さを伝えつつ、復興への道のりや防災・減災の取組の重要性を訴えていた。

災害科学科の生徒は、皆とても真摯に災害と向き合っているように感じた。大きな被害を受けた地域だからこそ、その教訓を伝えなくてはならないという強い使命感を持っており、また、各地の防災・減災の取組につなげてほしいという意識で伝承活動に取り組んでいる姿勢が素晴らしかった。

多賀城津波伝承「まち歩き」MAP

「まち歩き」の様子

参加した先生方より

- 災害科学科が設置され、防災・減災だけでなく、災害について知り「伝災」していく取組を行っているところが興味深かった。SSH 指定校で、たくさんの校外活動や探究活動の経験を積んでおり、また、授業中は生徒同士で質疑応答が積極的に行われ、自分の考えを言語化する力が高いと感じた。津波伝承まち歩きでも２年生が１年生に教える姿を見て、活動もしっかりと引き継がれていると感じた。案内してくれた生徒は自分の将来の目標をはっきりと話しており、意思の強さを感じた。
- 災害の記録、記憶の伝承のために語り続けていくことの重要性を学んだ。また、震災時の当事者より他者の講話のことが記憶に残ることを知り、現在の高校生から多くの人へ震災の記録や記憶を伝えてほしいと思った。青森県は防災への当事者意識は低いと感じたので今後も多賀城高校をはじめ宮城県との交流を深め、多くの学びの機会がほしいと感じた。
- 授業に関して、生徒が自ら主体的に学び、対話を重ねている点が印象的であった。ループ図を用いたアイデア出しは意見を発展させる手法として大変参考になる。また、生徒の案内によるまち歩きは、準備されたものだけでなく、質問にも臨機応変に回答できていた。普段の授業から対話的で深い学びがなされているからこそ、どのような場面でも考え、調べたこと、情報をつなげられるようになったのだと思う。
- 多賀城高校に直接お邪魔して授業や防災学習棟（旧仮設住宅）を観させていただいたこと、災害科学科の取組概要、カリキュラムそして生徒の様子を知ることができた。SSH 事業の指定を受け、関連付けながら被災地にある学校として、防災・減災のリーダーとして国際的に活躍できる理系人材の育成を目指す姿はとても参考になった。雨の中、まち歩き巡検でも生徒達の丁寧な対応に感心するとともに実効性のある「伝災活動」に感銘を受けた。
- イオン多賀城店をスタートして、市中心部を生徒の案内で多賀城駅までまち歩きを行った。小雨の降る中であったが、生徒は熱心に説明・案内してくれ、震災当時の津波の脅威を、身をもって学ぶことができた。震災翌年の 2012 年に、市内の壁や塀に残る津波の跡を計測して、近接する電柱に同じ高さで印をつける活動を行った。その後、各署へ説明会を行い、印の上に生徒が作成した「津波波高標識」を付ける活動を行った。この標識は市内に約 200 か所もの電柱に設置されている。

「まち歩き」の終点　「多賀城市東日本大震災モニュメント」

１０月１９日（土）

訪問先：石巻市震災遺構大川小学校

〇語り部ガイド　大川伝承の会　鈴木　典行　氏

大川小学校は、東日本大震災による津波で多数の児童・教職員が犠牲となった。当時大川小学校に通っていた娘を亡くした語り部の鈴木氏より、どうして大川小学校で多くの尊い命が亡くなってしまったのか、実際の現場を歩きながら、厳しく悲痛な問いが投げかけられた。

大川小学校では、津波を想定した訓練が実施されていなかったなど、平時からの備えができておらず、地震が発生してから高台に避難しなかったことで悲惨な結果を招いてしまったとされている。大きく損壊した校舎、周囲の何もない更地を見渡しながら、当時大川小学校で何が起こったのかを解説していただいた。

語り部・鈴木氏の話を伺いながら、日頃の危機意識と判断・行動の重要性を改めて感じた。実際の災害が発生した際に自他の命を守る行動を取れるかどうかは、普段から危機意識を持っているか、災害発生時の状況を想定した訓練を行っているかなど、平常時から防災・減災について正しい知識を持ち、日々の取組を積み重ねていくことがとても重要であることを再認識した。

訪問先：みやぎ東日本大震災津波伝承館

〇館内見学

東日本大震災からの復興の象徴であり、震災の教訓を伝承することを目的に造られたみやぎ東日本大震災津波伝承館を見学した。

館内には、震災の発生メカニズムや被害状況がわかるパネル展示や、実際に被災した方や震災当時救助や復興活動の第一線に立っていた方の声を聞くことができるシアターなどが設置されていた。また、宮城県内外の語り部や伝承活動を行っている方々によるメッセージ映像が数多く視聴できるようになっており、震災関連伝承施設・団体のハブ的な役割を果たしていた。

建物の屋根の高さは、この地を襲った津波が停滞した時の高さ（6.9m）

参加した先生方より

- 現在は周辺が整備され、大川小学校のみが遺構として残されているが、かつてそこに多くの住宅があり、人々の生活があったかと思うと、津波の破壊力の凄まじさは言葉にならないものであった。また、ガイドの体験談は涙なしでは聞くことができず、辛い思いをしながらも丁寧に案内をしてくれたガイドの方にも感謝の意を表したい。学校防災について、校内の避難経路の確認だけではなく、二次、三次避難まで想定して訓練を行わなければならないと強く感じた。
- 教師として今一度生徒のことを考え、向き合わなければならないと強く感じた。自分の子を亡くした方の話は非常に心苦しいものがあるが、同じ過ちを繰り返してはいけないと必死に話す姿を目の当たりにして、今一度命の尊さについて考えるきっかけとなった。防災について関心を深めるのはもちろん、日々の生活を大切に生きることがいかに大切かを考える機会になった。
- 震災遺構として残されている旧大川小学校の現場に直接伺い、大川伝承の会共同代表の鈴木典行氏から、とても貴重なお話をうかがうことができた。災害はいつ、どこでも起こり得るものとして、想像力をかきたて、常日頃より危機管理マニュアルの見直し・改善活動を進めて実効性のあるマニュアルにしていかなければならないと強く思った。また、教職員間の良好なコミュニケーションを常日頃からとることのできる職場環境の構築も大切であると痛感した。
- 他の震災遺構と異なり、「そのまま残す」という形が印象的であった。語り部による案内は過去に他の方の話を聞いたことがあるが、やはり人が変わると違った視点の話が聞ける。一度聞いて満足するのではなく、人により変わる体験・考えを生徒にも共有できないかと思った。教員の危機管理・避難に対する備えを強化することの重要性と、非常時にこそすぐに話せるような信頼関係を普段から築いておきたい。
- 大川小学校での津波被害に遭った遺族である鈴木氏の言葉は、一つ一つに重みがあり、学校現場での安全管理がいかに重要であるか身をもって感じることができた。裏山に避難することで難を逃れることができたということは結果論であるが、事前に津波を想定した避難訓練を実施していれば防げた人災であると思う。今回見聞したことを基に、近年多くの地区で発生している自然災害を自分事として捉え、災害に対する備えを十分なものにしていきたいと思う。特に、本校は、災害時に指定避難所としての役割があることから、生徒、職員が一丸となり、防災教育の充実を図っていきたい。

裏山から見る震災遺構大川小学校の全景

高さ 8.6m の津波が襲った

あおもり高校生防災サミット

県立学校の実践校における防災教育の様々な取組等について、実践校の生徒同士が意見交換を行い、防災に関する学びを深めるとともに、教職員や高校生をはじめ、地域防災に関わる方々へ広く発信することにより、本県における防災教育の充実を図ることを目的に開催した。

日程：令和７年１月２８日（火）

時　間	内　　容
１０：００～１０：２０	受付
１０：２０～１０：２５	開会行事
１０：２５～１０：３０	オリエンテーション
１０：３０～１１：２０	講義「災害・防災とは」 東北大学災害科学国際研究所　准教授　佐藤　翔輔　氏
１１：２０～１１：３０	移動・休憩
１１：３０～１２：３０	実践発表・避難所体験
１２：３０～１３：１５	昼食・休憩
１３：１５～１４：０５	防災ワークショップ
１４：０５～１４：１５	移動・休憩
１４：１５～１５：１５	演習「防災に関する学びを深めるために私たちができることは何か？」
１５：１５～１５：３０	講評
１５：３０～	閉会行事

場所：青森県総合学校教育センター（青森市大矢沢字野田８０－２）

実践校の高校生が作成したチラシ２種

生徒による運営

代表生徒あいさつ

○講義　「災害・防災とは」

講師　東北大学災害科学国際研究所　佐藤　翔輔　准教授

「災害とは何か？」という問いかけから、地震や降水量などの詳細なデータを明示しながら、「災害」の定義について分かりやすく解説していただいた。

一般に「災害」＝外力×社会の防災力（脆弱性）で表現され、「災害」が発生するか否かは、外力そのものの強さではなく、社会の脆弱性により外力が被害を抑止する限界を超えるかどうかによる。日本の現状では、地震や降水量といった外力は年々増えている傾向にあるが、社会の脆弱性を下げる（社会の防災力を上げる）ことで「災害」を小さくすることができる。

また、「防災」は被害を抑止することが目的で、「リスク回避」と「リスク緩和」に分類され、「減災」は被害が出ても最小限に抑えることが目的で、「リスク転嫁」と「リスク受容」に分類される。阪神・淡路大震災や熊本地震において、安価で強度が弱い建物の１階部分の倒壊により、２０～２４歳の若い世代が数多く犠牲となった事例から、直接命を守るために効果的なことはリスク回避やリスク緩和であることが言える。

最後に、防災や減災の役割や効果を正しく理解し、個人や地域、社会でリスク回避・緩和・転嫁・受容に取り組んで災害の影響を小さくしていくことが必要であるとのお話をいただいた。

参加者より

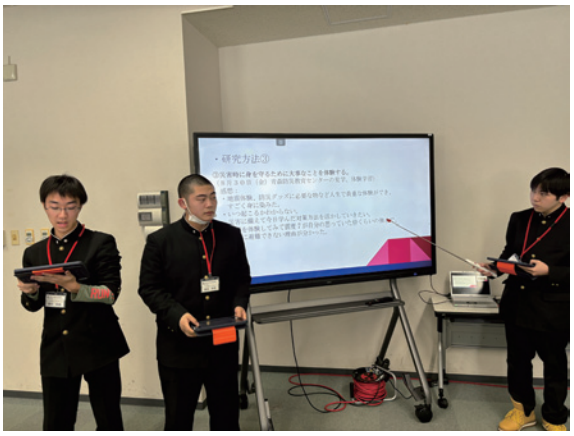
- 災害の大きさは外力×脆弱性で、地震などの直接的な力だけでは決まらないということが深く印象に残りました。また、命を守ることができる効果の強さと、防災・減災のイメージの強さは反比例してることがわかって驚きました。（生徒）
- 災害がどのようにして起こるのか、なぜ日本は他の国に比べ災害が起きた時に被害を最小限に抑えることができるのかなどについて詳しく知ることができた。（生徒）
- 防災と減災の違いについて、また優先度について生徒に指導する機会がなかった。リスクの回避、緩和、転嫁、受容の４つについて、生徒自身が考えることができてよかった。（引率教員）
- 災害がどのようなものであるか理解が深まり、防災・減災につなげていく考え方を学ぶことができました。（一般参加者）
- 「防災」は馴染みのある言葉だったが、「減災」は初めて聞いたこともあり、興味深い内容だった。日本は海や山、四季に恵まれ住みよいと思っているが、一方でリスクもあることを理解し、共生していくことが大切だと感じた。（一般参加者）

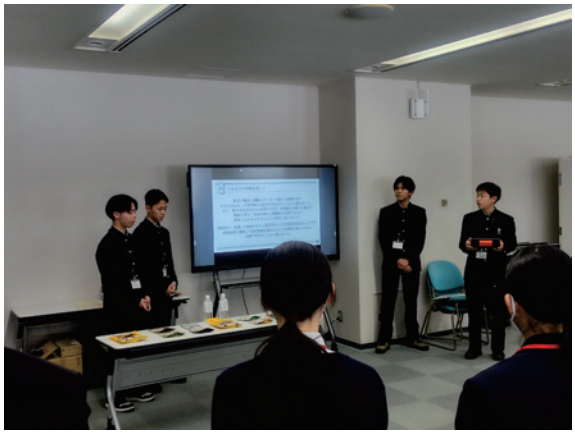
○実践発表・避難所体験

実践発表では、各実践校において今年度取り組んできた防災学習について、ポスターやスライドを用いた発表が行われた。実践校では、防災学習で作成した防災グッズを持参したり、実践の様子を動画で見られるようにしたりするなど、それぞれの発表に工夫が見られた。

・ポスター発表　　下北BOUSAIネットワーク（※）、名久井農業高校、青森工業高校
・スライド発表　　青森北高校、弘前南高校　　（※）電子黒板を活用

避難所体験では、実践校の防災学習で使用したシェルターテントや段ボールベッド、防災リュックなどを持ち寄り、展示や体験を行った。





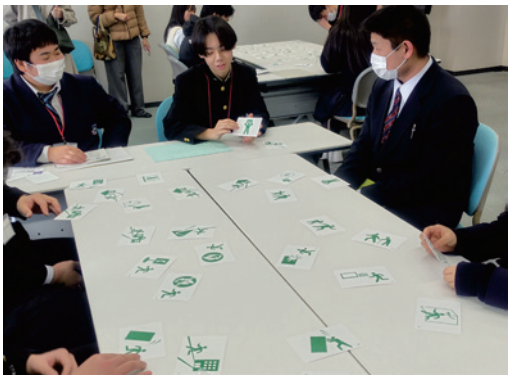
参加者より

- 外部の方を招いての活動や、学校全体、地域の方を巻き込んだ活動など、まだやったことの無いものもたくさんあったのでとても参考になりました。（生徒）
- 高校により活動内容が全く違っていて面白かったのと、それに加え、自分達では思いもしなかった防災グッズや防災についての考え方などがたくさんあり、より知見を深めることができました。（生徒）
- 地域によって防災の重点を置くところが違うことを知り、地域に合わせた防災が特に重要となってくると思った。（生徒）
- 実践発表は発表者側で参加しましたが、質疑応答などで様々な方にご意見をいただき、非常に参考になったので良かったです。（生徒）
- 他の高校がどのような取り組みをしているのかについて知ることができたので、これからも防災教育を通して防災意識を高めたいと思いました。（生徒）
- どの学校の発表も生徒達が生き生きとしていて、活発な様子を伺うことができ、この事業の取組が生徒達の成長につながっていると感じた。（引率教員）
- 各校のリアルな取り組みを確認することができた。お互い刺激し合うことによって、次年度へのバージョンアップが図れるのではないかと感じた。（引率教員）
- 生徒主体による訓練活動や防災・減災に向けた活動とともに、地域の方々と共に実践している姿がうかがえました。（一般参加者）
- 各校の取り組みの発表や、グッズの紹介など、どのブースもとてもよかった。学校でも取り入れたり紹介したりしたい内容だった。（一般参加者）
- 他校の取り組みを直接、詳細に窺い知ることができ、とても良い機会となった。それぞれ発表方法も個性があり面白かった。（一般参加者）

○防災ワークショップ

下北BOUSAIネットワークの生徒がファシリテーターとなり、カードゲームを用いて防災知識や災害発生時の行動などについて楽しく学んだ。また、グループごとに防災に関するピクトグラムづくりにも取り組んだ。

・防災カードゲーム　シャッフル（株式会社幻冬舎エデュケーション）
・減災アクションカードゲーム（東北大学）
・グループワーク　防災ピクトグラムづくり



参加者より

・　ゲーム感覚で災害時の瞬時な対応を学び、他の人の意見を聞き新たな選択肢をインプットできるとても参考になるものであった。防災学習には、こんな手段があるのだと驚かされました。（生徒）

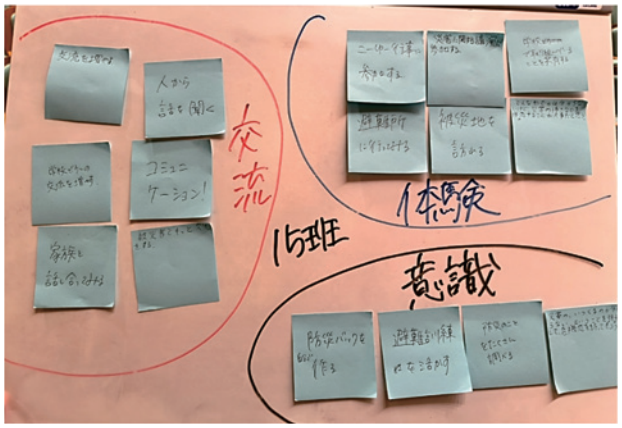
・　初めての人とのグループ活動でしたが、自分には無い意見をたくさん聞けて、他の人の意見を聞くことは大切だと思いました。ピクトグラム作成も協力し楽しくできたと思います。いい時間になりました。（生徒）

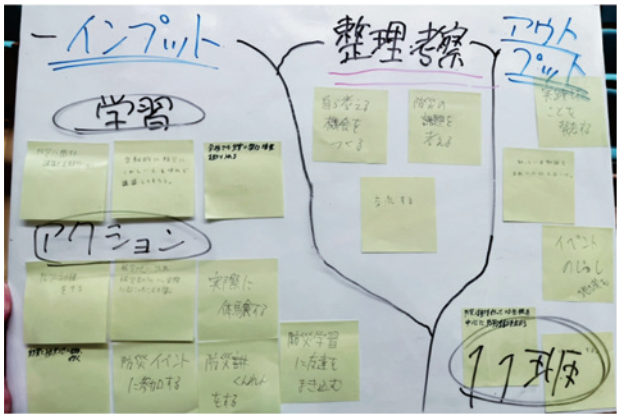
・　生徒達の中に入って実際にゲームを体験したが、ゲームのルールが分かると楽しむことができた。カードに書かれている内容も難しいものもあり、高校生には丁度良いレベルの内容だと思った。今回は初対面の生徒同士だったので、おとなしい雰囲気で進んでいたが、カードを通じて徐々にコミュニケーションも捗っていたように思う。ファシリテーター役の生徒の進行が大変素晴らしかった。（引率教員）

・　ゲームののち新たなピクトグラムを考えるグループに参加しました。内容が興味深いことはもちろんのこと、集まった生徒たちの防災に対する発想が柔軟で、それぞれにしっかりと意見を持っていることが印象的でした。１年間防災に携わったことで、災害時にリーダーとなり得る人材が育っていることを実感しました。（一般参加者）

〇演習　「防災に関する学びを深めるために私たちができることは何か？」

異なる学校の生徒で構成された演習班に分かれて様々な意見交換を行い、防災に関する学びを深めるとともに、これまでの防災学習の実践例を踏まえて、防災学習の新たなアイデアを提案することを目的にグループ演習を行い、生徒同士協力しながら意見をまとめ、発表する取組を行った。





参加者より

- 色々なアイデアを聞き、整理、深化することで１つのアイデアが他の意見でさらに良くなり、他のアイデアを生み出すことにつながる学習だなと思いました。また、他の班の発表を聞いて「そんなアイデアや分け方があるんだ！」と知ることができました。（生徒）
- 他の学校の生徒となかなか意見交換できる機会がなかったので、新しい意見やアイデアを考えることができ、とても楽しく学習できました。（生徒）
- 他校の生徒の方々が防災について理解を深められる案を出してくれたおかげで、みんなで協力し学びを深めることができ、素晴らしい演習となりました。（生徒）
- 防災に大事なことをグループで出してまとめることができた。やっぱり今自分ができることを最優先にすることが大事である。（生徒）
- どの班も活発に意見を発表し、よくまとめられていたと思う。普段は受け身がちな本校の生徒もグループの中で自ら意見を述べている様子も見られたので、校外に出て活動する場面が生徒の成長につながると思った。（引率教員）
- 各グループの考えを発表し合うことで、共通することや新たな視点を得られることが生徒たちにとって大きな学びとなっていると感じました。（一般参加者）
- 発災した際は、高校生達にある程度お願いして活発に動いて貰う事が出来るのが、頼もしく感じた。（一般参加者）

○講評　東北大学災害科学国際研究所　佐藤　翔輔　准教授

率直に青森県の高校生のレベルが高いと感じた。演習についても、生徒のまとめ方が上手で、よく言葉に表現できているなと感じた。「防災」は、災害が発生してから盛り上がる傾向にあるが、それでは遅い。災害の少ない青森県は今がチャンスである。本番が来た時に力を発揮するため、楽しみながら防災教育の実践と学びを継続してほしい。

参加者より～サミット全体を通じて～

- 今回のサミットをとおして、もっと防災について学びたいと思えました。防災と聞くと難しいイメージがあるけれども、私たちにできることはたくさんあり、自然と共生していくためにも１人でも多くの人が防災意識を高めることが大事だと感じました。災害は防げる限度があり、無くすことはできないけれども、住む場所を考えたり減災できるようしっかり考えたりすることも大切だと思いました。また、他校の生徒ともたくさん交流でき、このように集まってできることは中々ないと思うので本当にいい経験になったと思います。良い１日になりました。ありがとうございました。（生徒）
- 本サミットでは様々な活動をしましたが、全ての活動が自分のためになるものでした。また、他校の生徒と一緒に協力し学びを深められる良い機会でした。これを契機として、防災チームだけでなく青森県全体で活動できたらいいなと感じました。（生徒）
- 他校でも防災についてたくさん実践していることがわかったし、自分たちの今後の活動にも繋げれるような時間であったと思うので、参加して良かったなと思いました。（生徒）
- 参加できてよかったと思える活動だった。たくさん苦労することがあったが、自分の意見をまとめて発表できる環境がとても大切だと感じた。（生徒）
- 本サミットを通して青森県全体で防災に取り組んでいる事を実感することができた。本校でもできることからはじめていきたいと強く思った。（引率教員）
- せっかくの機会ですので、昼食についても防災に関する内容を入れたら面白いと思いました。メスティンやアイラップ、防災食など。主催者だけですと、大変かと思いますので、みんな準備したら良いと思います。服装についても、防災活動にふさわしい格好で参加したら面白いと思います。（引率教員）
- 自分たちの世代からは考えられないほど、自ら様々なことに興味を持ち行動を起こす姿に感銘を受けました。（一般参加者）
- 教師が指導するというより、主体的に考え参加する取り組みで、どの実践も今後の参考になってよかった。（一般参加者）

第２部

実践校における取組

青森県立青森北高等学校

１　防災教育の主題・テーマ

地域と協働した安全な社会づくりのための防災対策について
～地域のために、わたしたちができる防災・減災について～

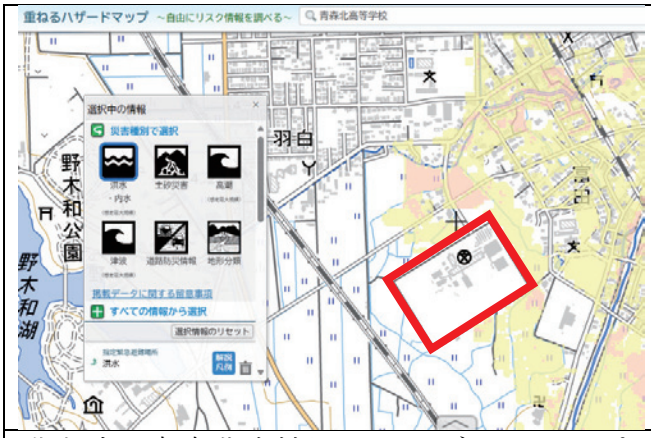
２　対象生徒

普通科２年９名、スポーツ科学科２年５名
（総合的な探究の時間「KITA プロジェクト」におけるグループ「青北防災チーム」）

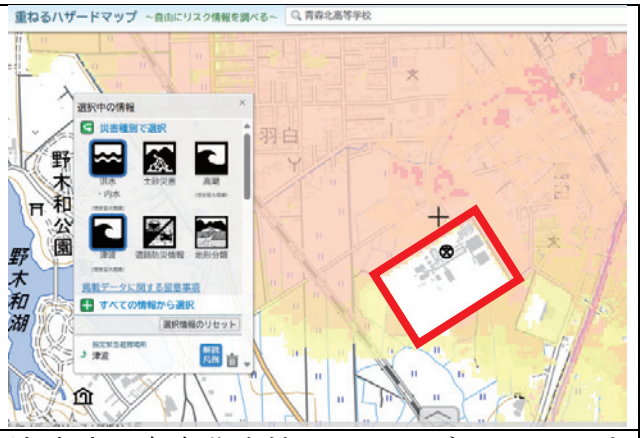
３　所在する地域の特徴

青森市は県庁所在地で、市内には青森港があり物流の拠点としても重要な役割を果たしている。人口は約２６万人で近年は減少の一途をたどっている。

学校の所在地である油川地区は、青森市内の北西部に位置し、青森駅からは比較的近い距離にあり陸奥湾に面している。この地区は、海に近いため、漁業や海岸沿いの景色が特徴的である。



洪水時の青森北高校周辺のハザードマップ



津波時の青森北高校周辺のハザードマップ

『重ねるハザードマップ』より引用

本校は、周辺の土地より若干高い場所に位置していることもあり、災害発生時における指定緊急避難場所及び指定避難所となっている。災害時は、第一体育館及び第二体育館に約８７０人を収容することとなっている。

青森市油川地区における過去に発生した水害は、昭和４４年８月の台風９号や、昭和４９年９月の台風１８号などが大きな被害をもたらした。これらの水害では床上・床下浸水や道路冠水が発生し、多くの住宅や農地に影響を及ぼした。

青森市ではこれらの過去の水害を教訓に、浸水等実績マップを作成し、市民に対して浸水のリスクを知らせる取組が行われ、防災対策を強化している。

青森市ホームページ
【青森市浸水等実績マップ】
https://www.city.aomori.aomori.jp/anzen-kinkyu/bousai-syoubou/shinsuimap/index.html
【各種ハザードマップ】
https://www.city.aomori.aomori.jp/kikikanri/anzen-kinkyu/bousai-syoubou/hazardmap.html

４　防災上の課題

（１）防災教育について

①地域との連携の強化：地域住民との連携を深め、災害時に役立つ訓練を行う。
②防災訓練の充実：災害シナリオを想定した訓練を実施し、生徒たちが適切な行動をとれるようにする。
③教育内容の充実：防災に関する知識や技術を教えるだけでなく、実践的なスキルも身に付けられるようにする。

（２）災害発生時の危機管理・避難について

①緊急連絡体制：事前に緊急連絡先を設定し、迅速に連絡を取れるようにする。
②避難ルートの確認：学校内外の避難ルートを確認し、避難経路を明確にする。
③避難訓練：定期的に避難訓練と避難所としての訓練の実施を行い、生徒・教職員が災害時に適切な行動をとれるようにする。
④備蓄物資：非常食や水、医薬品などの備蓄物資を準備する。
⑤情報提供：緊急時には迅速に情報を提供し、生徒や保護者に適切な指示を出す。

５　防災教育の取組

（１）油川小学校の避難訓練の見学及び訓練補助

日　時　令和６年６月５日（水）１３：４０～１４：００

場　所　本校グラウンドほか

ねらい　本校の総合的な探究の時間「KITAプロジェクト」において、『防災・減災』を研究テーマとしたグループが、油川小学校の避難訓練を見学・訓練補助を行うことで地域との連携を深める。また、災害時における避難所としての課題等を探ることを目的とする。

対　象　・油川小学校全校生徒４１２名＋２５名（小学校長が引率責任者）
・２学年生徒８名（KITA プロジェクト「青北防災チーム」）

内　容　①　小学校児童・教員誘導
②　人員確認、講評、本校生徒より避難所について説明
③　敷地内案内（グラウンド、柔剣道場等）後、校門前まで誘導

感想等　・地面の凸凹や段差があり、歩きづらいところがあったため、小学生が歩きやすい経路が必要だと思った。
・案内する際に光る誘導棒が必要だと思った。
・緊張したけれどもうまく案内することができた。

当日の様子

①油川小学校児童が本校グラウンドに２次避難している。

②全校児童が学年ごとに整列し、人員確認している。

③生徒による避難所についての説明

④生徒による北高の敷地内の施設紹介

（２）防災教育についての出前授業

日　時　令和６年７月８日（月）１２：５５～１４：２５（短縮授業）

場　所　本校視聴覚室

ねらい　・講義やワークショップの活動を通して、災害と防災について理解を深める。
・通学している地区の環境の特性を知り、災害を未然に防ぐための対策について考える。

講　師　青森中央学院大学経営法学部　准教授　中村　智行　氏

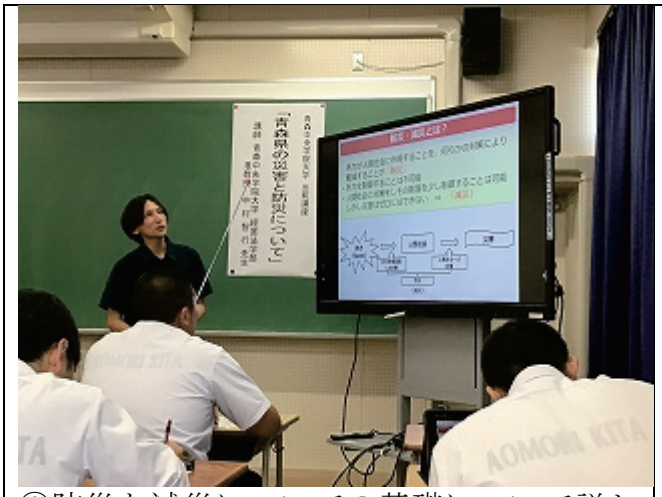
演　題　「青森県の災害と防災について」

対　象　普通科２年９名、スポーツ科学科２年５名
（KITA プロジェクト「青北防災チーム」）

内　容　①　災害とは？
②　青森県の災害
③　地震・津波防災
④　洪水・土砂災害
⑤　ハザードマップ
⑥　避難行動

感想等　・青森の周りでも陸奥湾まで津波が来ること、津波は遅ければ波が高くなり、早ければ波が低いことを学んだ。
・津波、洪水などの避難方法は必ずしも学校に逃げるのではなく、浸水想定区域外に逃げることも考える。
・これから先に起こるかもしれない災害の時、被害を抑える避難の仕方が分かりました。
・とてもためになる講座だったので、学んだことを友達や親に教えたいです。

当日の様子



①防災と減災についての基礎について詳しく教えていただいた。

②陸奥湾に津波が来るかもしれないことが分かり、自分事として聞くことができた。

（３）県防災教育センター見学及び体験学習

日　時　令和６年８月３０日（金）１３：３０～１５：３０

場　所　青森県消防学校　防災教育センター

ねらい　災害時に自分の身を守るために大事なことを、体験活動（防災 DVD 視聴、119 番通報、地震体験、消火体験、防火衣着用体験、煙避難など）を通じて理解を深める。

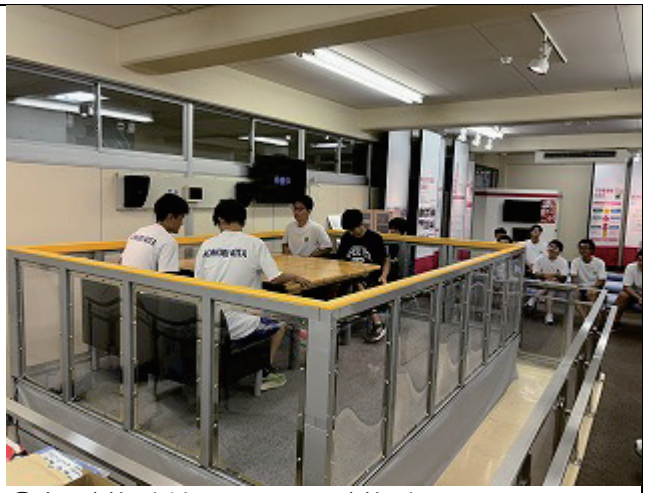
対　象　普通科２年９名、スポーツ科学科２年５名
（KITA プロジェクト「青北防災チーム」）

内　容　①　防災 DVD 視聴、講義
②　地震体験
③　消火体験（水消火器による）
④　煙避難

感想等　・地震や消火器などの体験が今までなかったので、すごく身に染みました。
・いつ起こるか分からないので今日学んだことを活かしていきたい。
・いつ大きい災害が起きてもいいように、日頃から避難の準備をしておきたいです。
・災害で死なないためにも準備、避難場所を確認しておきたいと思った。

当日の様子

①防災についての DVD 視聴と講義の様子



②起震体験機による地震体験

③水消火器による模擬消火訓練

④模擬煙による煙体験

（４）避難訓練における「避難所受入想定訓練」の運営

日　時　令和６年９月１２日（木）１４：３０～１６：００

場　所　本校第一体育館及び各ホームルーム教室

ねらい　本校は指定避難場所及び避難所に指定されている。地域住民に避難訓練に参加してもらい、避難所としての避難者受入れの流れを確認し、避難生活を想定した訓練をイメージし、災害時に冷静かつスムーズに行動できることを目的とする。

対　象　全校生徒・教職員及び地域住民

内　容　①　従来の避難訓練（第Ⅰ部）終了後、地域住民が生徒玄関から入り第一体育館に避難してくる。（避難してくる様子をGoogle Meetで中継し、生徒は教室でその様子を見る。）

以下は地域住民、本校生徒も同じ

②　「避難所開設マニュアル」について理解を深める。

③　災害発生に備えて、各家庭で準備しておくべきものについて知る。

④　備蓄する予定のアルファ化米について説明し、実際に作って試食する。

⑤　要配慮者用の段ボールベッドを組み立て、実際に触れて強度を実感する。

感想等　・今回この訓練を受けて多くのことを学ぶことができました。特に段ボールベッドの紹介がとても有用性がありすごいと思いました。災害時以外にも、もし遭難した時などとても使えると思いました。

・災害が起きてからも大事だが、起きるまでの準備もしっかりやっておきたいと思った。

・今日もう一回家族と避難場所や避難の仕方、防災食などの話をしてみたいと思いました。

当日の様子

①生徒玄関で地域住民の受付

②本校生徒による防災活動の紹介

③市職員による防災グッズの紹介

④地域住民と段ボールベッドの組立て

報道記事（新聞・テレビ局動画）

令和６年９月１２日（木）青森朝日放送ホームページより
https://www.aba-net.com/news/news-124534.html

第47852号　（第三種郵便物認可）　東

青北高と地域 初の避難訓練

青森

青森市の青森北高校（三浦真校長）と羽白地区の住民が12日、合同で避難訓練を行った。同校は指定避難所に指定されており、地域と同校が連携して避難訓練を行うのは初めて。全校生徒や教員のほか、住民約40人が参加し、津波発生時の避難ルートや防災マップの見方を確認したほか、避難時に使用する段ボールベッドの作製に臨んだ。

同校の第1・第2体育館は災害時に約870人を収容できる。訓練は避難者受け入れの流れを確認し、災害時に円滑に行動できるようにするのが目的。地震で津波が発生したとの想定で、地域住民が第1体育館に避難した後、生徒の代表が避難訓練の重要性を説明した。

同市危機管理課の川越大貴主事は簡易トイレの使い方などの防災グッズを紹介し「各家庭の生活に合わせて日頃から備蓄して」と呼びかけ、住民らは真剣な表情で聞き入っていた。

このほか、代表生徒7人と地域住民が段ボールベッドを協力して作製して寝心地を体験したり、お湯を入れて作るアルファ化米を試食した。

参加したひばりの町会の江利山正勝町会長(83)は「学校との連携があれば安心して避難できる。災害時は近隣と助け合いながら避難したい」と話した。同校2年の福田大和さん(17)は「子どもや高齢者など一人で避難するのが難しい人に率先して手を差し伸べたい」と語った。（木村真悠）

簡易トイレの使い方など、防災グッズを確認する住民と生徒たち＝青森北高校

防災意識 高

令和６年９月１８日（水）東奥日報記事

（５）「あおもり防災チャレンジ」への参加

日　時　令和６年１１月１５日（金）９：００～

場　所　本校校舎内

ねらい　県で設定している「あおもり防災ウィーク（１１月５日（津波防災の日）～２４日)」における「シェイクアウト訓練」に全校一斉に取り組むことで防災意識を高めることを目的とする。

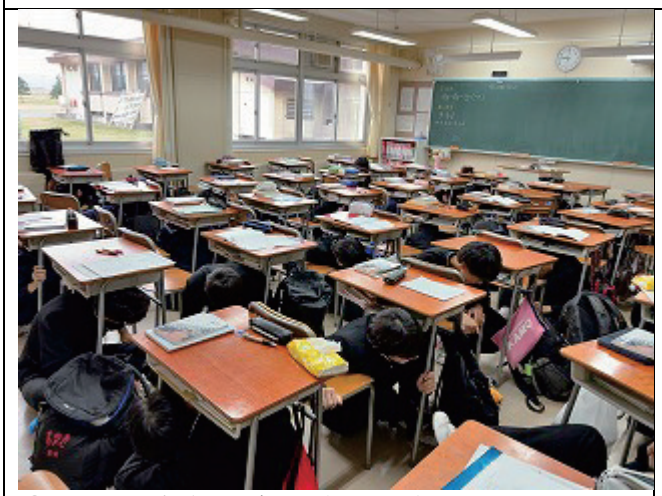
対　象　全校生徒・教職員及び来校者

内　容　地震発生を想定して、校内一斉に１分間程度、揺れの瞬間に自らの身を守る「安全確保行動」をとる。

感想等　・授業をしているときに地震が来たときをイメージすることができた。
・実際に机の下に隠れることで、地震発生に備えることができると思った。
・普段の避難訓練より緊張感を持って臨むことができた。

イベントのバナーと当日の様子

青森県庁ホームページ『令和６年度あおもり防災チャレンジ』
https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kikikanri/bousai/bosaichallenge061115.html



①生徒は真剣に身を守る訓練に取り組んでいた。

②教員も一緒になり訓練に取り組んだ。

（６）「SDGs QUEST みらい甲子園」へのエントリー

日　時　・エントリー期間（令和６年９月２０日（金）～１２月５日（木））
　　・最終審査用プレゼン動画提出（令和７年１月１３日(月)）

主　催　SDGs QUEST みらい甲子園青森県大会実行委員会

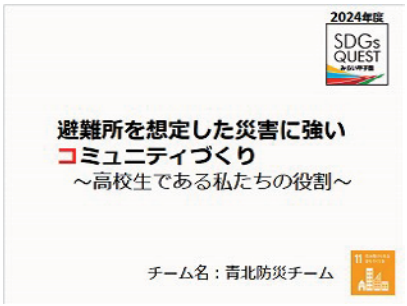
趣　旨　新学習指導要領に記載されている“持続可能な社会の担い手”を育てるために SDGs を起点とした社会課題解決に向けた行動を促す機会を創発していくことを狙いとしている。

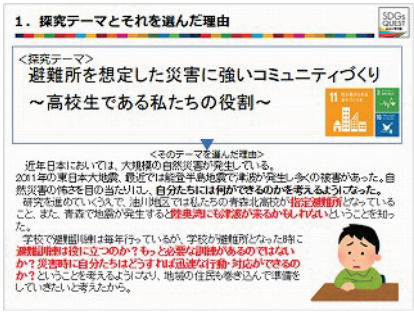
内　容　SDGs の目標達成に向けた高校生によるアクションアイデアプランを、既定のパワーポイントの様式にまとめエントリーする。その後一次審査が行われ、審査通過チームが最終審査に向けてプレゼン動画を作成し提出する。
　本校「青北防災チーム」は一次審査を通過し、２月１６日（日）青森県大会ファイナルセレモニー(表彰式や参加者同士の交流など)に参加予定である。

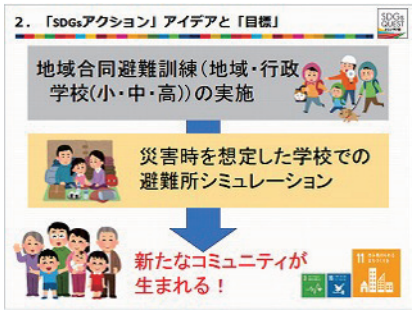
参加者　２学年生徒８名（KITA プロジェクト「青北防災チーム」）

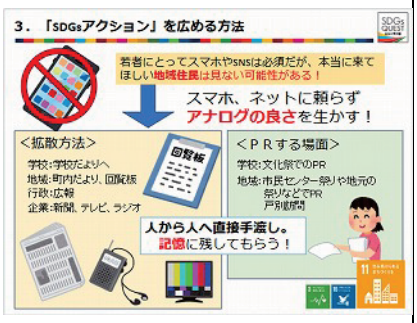
感想等　・「共助の精神」でお互いを理解し支えあうことで、災害が起きた時でも、避難所で安心して生活することができると感じた。
・コミュニティを広げることが、防災への第一歩に繋がることを学びました。
・災害が起きなくても、日常からお互いの存在を認め、心の繋がりを持ち、地域のみんなが支え合うことにより笑顔で暮らせることに繋がると思う。

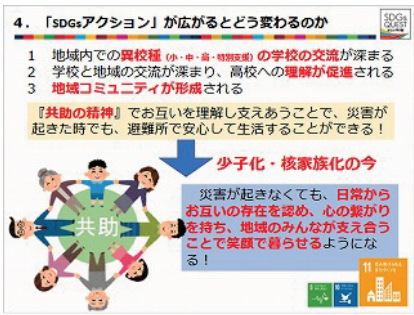
作成スライド

<table>
<tr>
<td> 

①タイトル</td>
<td> 

②研究テーマと設定理由</td>
<td> 

③アイデアと目標</td>
</tr>
<tr>
<td> 

④SDGs アクションを広める方法</td>
<td> 

⑤SDGs アクションを広めるとどう変わるのか</td>
<td>

⑥探究活動後の心の変容</td>
</tr>
</table>

６　成果と課題

成果としては、一年間の活動を通じて、生徒だけでなく教員も防災についての基礎知識を身に付け、災害に備えるための防災意識を向上させることができた。また、防災について学ぶことにより、地域社会の中で支え合う「共助の精神」や、コミュニケーションの大切さなど、学校の中だけでは身に付かないようなことも学ぶことに繋がったように思う。さらに、これらの活動の一部を学校全体でも取り組んだことにより、組織の防災意識の向上にも繋がったように思う。

課題として、災害はいつ何時起こるか分からない。備えあれば憂いなし。防災・減災について学ぶことは、命を守るための行動に繋がり、学校現場では生徒の命を守るために欠かせないものである。今回の取組を今年度限りにするのではなく、今後、継続・発展させていくことが最重要課題であり、学校の使命であるとも考えている。今後この事業の有無に関わらず、今年度構築したネットワークを活用しながら、次年度以降も積極的に地域と連携しながら防災教育に取り組んでいきたい。

青森県立弘前南高等学校

１　防災教育の主題・テーマ

「地域と連携した防災教育」～地域防災リーダーの育成～

２　対象生徒

２年次　総合的な探究の時間におけるグループ９名

３　所在する地域の特徴

出典：「ハザードマップポータルサイト」

広域で見ると、岩木川と平川に挟まれた高台に位置している。地域内の東西に寺沢川と土淵川が流れている。土淵川沿いには土砂災害（特別）区域が存在している。学校周辺に岩木川、平川による浸水想定区域はないが、寺沢川と土淵川は浸水想定に考慮されていないので、個人ごとに判断する必要がある。

震度６弱以上の地震発生時に避難所として近隣の３か所の小学校が開設されるが、不足時には本校も避難所になる。また、浸水災害時には、岩木川が警戒レベル４になると本校も避難所として開設される。令和４年８月豪雨で、本校が避難所として開設されたが、避難する住民はほとんどいなかった。

４　防災上の課題

（１）防災教育について

①　学校全体での体系的な教育がほとんどなされておらず、防災チームの取組が次年度へ継承できるかどうかが懸念される。運営母体となる校内組織が必要。

②　教員の防災に関する知識が不足しており、各教科等での防災教育に関連する指導を、ほとんど行うことができない。

（２）災害発生時の危機管理・避難について

①　本校は避難所指定されているが、避難所運営するための校内運営組織が脆弱であり、多くの住民の避難に対応できない可能性が高い。また、アルファ化米、保存水は多少備蓄されているが、その他段ボールベッドや毛布、簡易トイレなど圧倒的に不足している。市の救援物資到着には数日かかる可能性が高いことから、その期間必要な物資の確保と、教員と生徒が協働した避難所運営について組織の見直しが急務である。

②　過去の災害に学ぶ観点から本校周辺で発生する災害リスクを検証したが、切迫した危機的状況が確認できなかった。地域と連携した避難所運営を計画したが地域住民の参加率が低く、地域の防災意識が低いと予想される。

５　防災教育の取組

（１）防災関連施設見学①（津軽ダム）

日　時　令和６年８月２０日（火）
内　容　①津軽ダムの概要説明
　　②ダム内部（監査廊、コンジットゲート等）の見学

感想等
　津軽ダムは６つの目的がある多目的ダムであり、水質保全のためのバイパスが整備されているなど、説明を聞かないとわからないことがたくさんあった。令和４年８月の豪雨でも目屋ダムでは緊急放流の可能性があったが、津軽ダムによって危険が回避されたことを知り、改めてダムの重要性を知ることができた。

（２）防災講演会①

日　時　令和６年８月２６日（月）
講　師　弘前大学教育学部　教授　小岩　直人　氏
内　容　「津軽における自然災害リスクと防災」

感想等
　青森県の地形の特徴について説明を聞き、県内の災害曝露人口について学んだ。弘前市は６７．１％であったが、近隣の板柳町や鶴田町では１００％近い割合になっており、いつ災害にあってもおかしくない状況であることが理解できた。また、弘前市のハザードマップを読み取り、洪水などの災害が起きる可能性が高い箇所や指定避難所の場所について確認した。

（３）防災講演会②

日　時　令和６年９月２６日（木）
講　師　青森県防災危機管理課　主幹　若山　真紀子　氏
内　容　「災害への日頃の備え」

感想等

災害の種類（洪水、土砂災害、地震、火山）について説明を聞いた。東日本大震災のように太平洋側の海溝型地震については知っていたが、日本海側の海溝型地震が発生する可能性もあり、県でも被害想定をしていることを知った。防災・減災の取組として、情報収集の仕方やハザードマップの見方について学んだ。また、非常時の持ち出し品や備え方にについて、具体的な例が挙げられていてより理解を深めることができた。防災は自助・共助・公助のつながりで被害を軽減することが重要だと改めて認識した。

（４）防災関連施設見学②（弘前市備蓄倉庫　茂森倉庫）

日　時　令和６年１０月４日（金）
ねらい　市内防災関連施設（備蓄倉庫）の実態を把握するなど、地域と連携した防災活動を通し、地域防災リーダーの育成を目指す。
講　師　弘前市総務部防災課　小森　正明　氏
内　容　①弘前市、茂森倉庫の保管状況
②弘前市備蓄計画の説明

感想等

弘前市の防災倉庫の保管状況や備蓄計画の概要について説明を受けた。その後、倉庫内の見学をした。弘前市では地震、水害、土砂災害に対して、支給対象者数は最大で１９，０００人を想定している。しかし、備蓄品だけでは十分ではないため、公助だけをあてにするのではなく、自助・共助のために個人携行品をしっかりと準備しておくことが重要だと感じた。

（５）防災講演会③

日　時　令和６年１０月１１日（金）
講　師　防災士　今田　貴士　氏
内　容　「地域住民と連携した避難所運営」
①青森県防災士会について
②避難所開設・運営の基本事項
③避難者滞在スペースの確保
④学校校舎の利用方法
⑤避難者の受入と誘導

感想等

はじめに、青森県防災士会について講話があった。弘前市で防災士の資格試験の受験料が補助されていると知り、資格取得に挑戦したいという前向きな姿勢の生徒が見られた。

次に、１０月２６日に行われる「みなみ防災デー」に向けた避難所の運営方法について説明を受けた。避難所の開設から運営まで、やらなければいけないことがたくさんあることを認識した。また、災害が起きる前に、名簿の作成やレイアウトの考案など準備できることをやっておくことが重要だと知った。その後、「弘前市地域防災計画」を見ながら、避難所をどのように運営していくか意見を出し合った。これまでの東日本大震災や能登半島地震の避難所の過酷な実態を聞き、避難所運営の大変さを知るとともに、今後の取組について決意を新たにした。

（６）「みなみ防災デー」地域住民と連携した避難所運営

日　時　令和６年１０月２６日（土）

ねらい　①弘前南高校は指定避難所となっているが、行政の動きを待たずに、高校生が主体となって地域住民と協力して避難所を開設する。

②行政からの支援物資到着後、地域住民、行政、本校生徒が協力し、避難所運営に必要なスキルを身に付け、地域防災リーダーの育成を目指す。

内　容　①講演「弘前市防災マップの活用と日頃の備え」

講師　弘前市総務部防災課　小森　正明　氏

②演習「弘前南高校の避難所運営について」

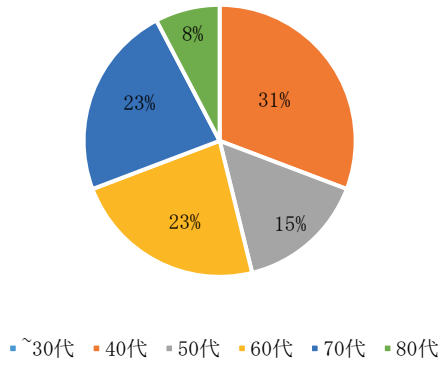
③非常食の調理、段ボールベッド・簡易トイレの制作

参加者　本校生徒・保護者、地域住民　約４０名

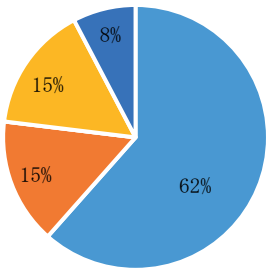
アンケート結果（地域住民のみ）

実施時間については「ちょうど良い」が１００％であった。

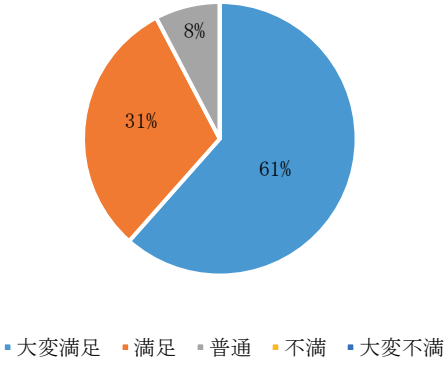
参加者の年齢



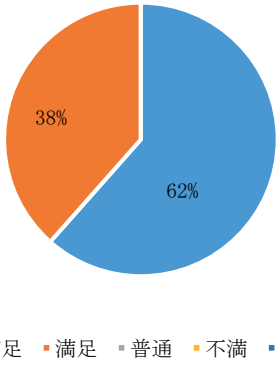
実施頻度の希望



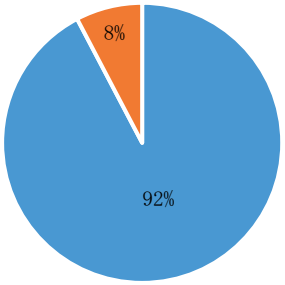
弘前市出前講義について



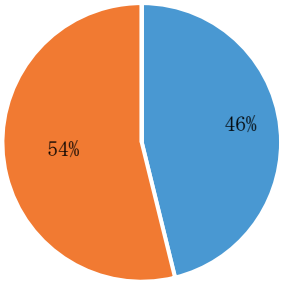
高校生の避難所運営について



実施時期



今後の参加



地域住民からの意見、要望

・１２月に実施してほしい。
・今後の開催も期待します。
・高校生との交流が楽しかった。
・運営よかったです。次回もぜひお願いします。
・防災意識が普段下がっているので、意識向上にとても良い企画でした。
・トイレなど実際に見ることができて大変良かったです。またお願いします。

感想等

講演では、これまでに弘前市で起こった災害を振り返り、今後どのような災害が予想されるのか考えた。その後、弘前南高校周辺の防災マップを見ながら、地形上の特性や危険区域、避難所の場所について確認した。次に、弘前市の備蓄計画を見ながら、必要な個人携行品について考えた。小森さんが実際に災害発生時の携行品をリュックに入れて持参してくださり、スライドで見るよりもイメージがしやすかった。最後に、新聞紙でスリッパを作成し、避難所と日常生活との差について考え、避難所での生活をいかに快適に過ごすかについて考えた。

演習では、生徒が考案した避難所のレイアウトについて説明した。町内会ごとに区分けすることや、ペット同伴者のスペース、トイレの場所や緊急車両が入ることを想定した内容で、地域住民の方も興味を持って聞いていた。

非常食の調理、段ボールベッド、簡易トイレの製作では地域住民の方と交流し、協力しながら作業を進め、防災で重要な「互いに顔が見える関係性」を作るにはこのような機会を定期的に設けることが必要だと感じた。初めての開催で試行錯誤しながらの実施であったが、アンケートの集計結果からも肯定的な意見が多く、地域の防災意識を高めるために定期的に実施したいと思う。実施時期がりんごの収穫期であったため、時期を検討し、より多くの人に参加してもらえるようにしたい。

（７）演習「中学生を対象とした出前講座」

日　時　令和６年１２月１７日（火）

ねらい　今まで受講した講義や演習又は地域住民と協働した避難所運営などのスキルをもとに、本校近隣の中学校に出向き、その成果を発表する。

対　象　弘前市立第四中学校　１年生

内　容　①発表「災害の種類と災害に対する備え」

②演習　段ボールベッド、簡易トイレの製作

感想等

これまで学んできたことの中から、災害の種類や備えについて、時折、クイズを織り交ぜながら、わかりやすく興味を持ってもらえるように工夫して説明するように心がけていた。最初は緊張した面持ちであったが、中学生の聴く態度も素晴らしく、次第に慣れてきた様子であった。

段ボールベッドと簡易トイレの製作は慣れた様子で、中学生に説明しながら一緒に作業に取り組んだ。中学生もベッドに横になったり、凝固剤で固めた水の感触を確かめたりするなど、反応も良かった。「防災は楽しく学ぶ」を体現していた。

６　成果と課題

成果としては、

・　講演会や施設見学など、関係機関と連携して、実践的な防災教育に取り組むことができた。
・　行政が取り組んでいる防災活動を知り、防災意識を高めることができた。
・　ハザードマップを活用し、地域で起こり得る災害についてより深く理解することができた。また、これから防災・減災へどう取り組んでいくか考えることができた。
・　避難所運営を通して、地域の課題や防災への取組について、生徒が自分事として受け止め、どうするべきかを主体的に考えることができるようになった。

などが挙げられる。一方、課題としては、

・　地域防災リーダーの育成のためには、今後も継続した活動をしていく必要がある。地域住民への周知、協力、連携をさらに推進する必要がある。
・　自助、公助、共助のつながりの重要さを認識し、自らの命を守るために主体的に判断し、行動する力の育成が必要である。

ことなどが挙げられる。

下北ＢＯＵＳＡＩネットワーク

青森県立田名部高等学校

青森県立大湊高等学校

青森県立大間高等学校

青森県立むつ工業高等学校

青森県立むつ養護学校

１　防災教育の主題・テーマ

「災害に強く、安全な町づくりに貢献する生徒の育成」

（１）防災当事者としての意識づくり

～災間を生きる生徒の、防災当事者としての意識をどうつくるのか～

（２）災害に強い人づくり・町づくり

（３）防災訓練の開発と普及

２　対象生徒

下北 BOUSAI ネットワーク参加校生徒

①田名部高等学校

②大湊高等学校

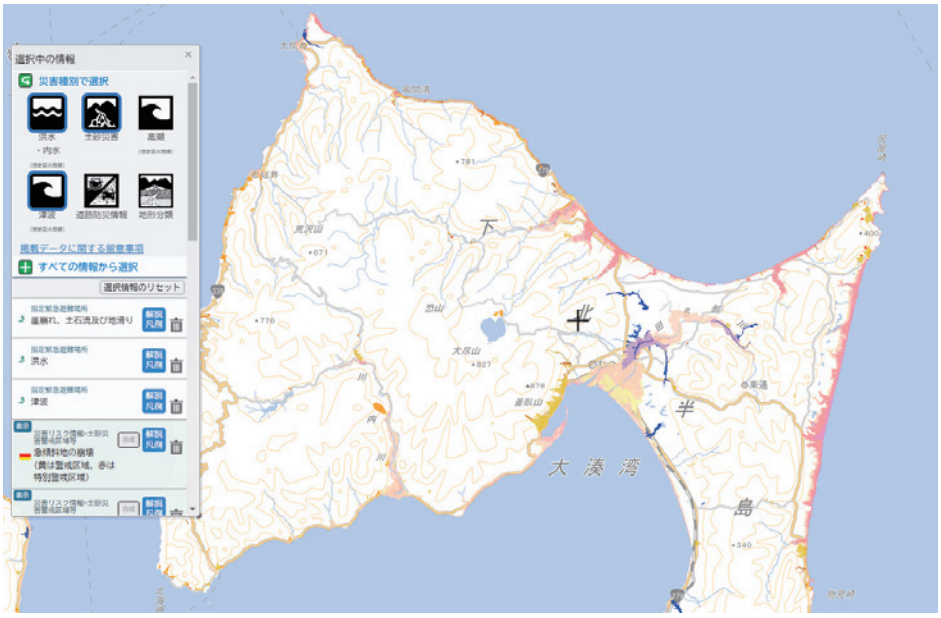
③大間高等学校

④むつ工業高等学校

⑤むつ養護学校

３　所在する地域の特徴

下北・むつ地域は、中央部に恐山（活火山）があり、多くの住宅地は、むつ市中心部と下北半島沿岸部に集中している。令和３年８月に、むつ市大畑地区及び風間浦村において、豪雨災害が発生した。



出典「ハザードマップポータルサイト」

４　防災上の課題

①住宅地が海岸線付近に集中しており、津波を含む浸水被害が懸念される。

②東通原子力発電所・大間原子力発電所が存在し、原子力災害が懸念される。

③活火山「恐山」があるが、火山対策は十分にされていない。

④避難所は指定されているが、避難所運営の準備は十分とは言えない。

⑤下北半島と野辺地をつなぐ幹線道路は１本しかなく、幹線道路の遮断で孤立の可能性がある。

⑥高齢化が進み、災害時の支援者が不足している。

⑦下北全体が海から急峻な地形で、土砂災害の危険性が高い。

⑧外国人も増加傾向にあり、出身国も多様で対応が難しい。

⑨災害時の支援中心となる若年層への防災教育は十分になされていない。

５　防災教育の取組

（１）岩手県宮古市田老町研修

目　的　・被災地を実際に見学することで、震災と復興について学ぶ。
・同地域の生徒同士の学び合いによって、むつ下北地域の防災意識向上につなげる。

日　時　令和６年６月８日（土）

場　所　岩手県宮古市田老町

主　催　下北 BOUSAI ネットワーク

日　程

時　間		詳　細
８：００	出発	田名部高校→むつ養護学校 車内事前研修　①今回の研修について ②「釜石の奇跡」等 昼食は車内で各自
１２：００	田老町	**田老町　震災学習・防災エコツアー（１２０分）** 防潮堤・たろう観光ホテル・避難道体験・ジオサイト三王岩震災遺構・防災エリアで講話を伺うことになります。 ※　田老町学ぶ防災　電話：０１９３７７３３０５ バス駐車場：道の駅　たろう　岩手県宮古市田老２丁目５−１
１５：００	現地出発	車内振り返り　①感想 ②合同報告会について 夕食は車内で各自
１９：００	帰着	むつ養護学校→田名部高校

参加人数　　合計２８名
大湊高校　　１７名
田名部高校　　１１名

宮古市田老地区防潮堤

震災遺構「たろう観光ホテル」

（２）東北電力東通原子力発電所研修

目　的　・原子力関連施設と共存する地域で、原子力発電所について学ぶ。
　　・同地域の生徒同士の学びあいによって、むつ下北地域の防災意識向上につなげる。

日　時　令和６年７月１３日（土）

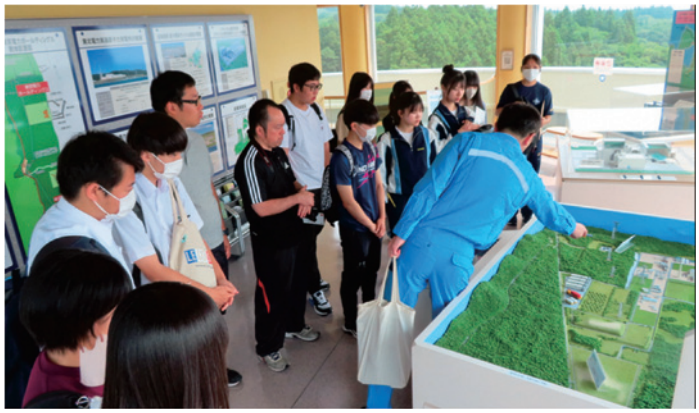
場　所　東北電力　東通原子力発電所

日　程

●日 時:2024年 7月13日(土) 8:40～11:40(所要時間:180分)

時 間	所要	対 応		場 所	備 考
8:40		トントゥビレッジ 到着			
8:40～9:00	(20)	発電所概要説明		展望室 1階原子力コーナー	
9:00		トントゥビレッジ 発			
9:05		発電所中央ゲート 着			
9:05～9:20	(15)	手荷物検査・入構手続き		中央ゲート	
9:25		事務本館 着		正面玄関	
		A班	B班		
9:25～10:25	(60)	・屋外安全対策設備見学 (防潮堤他) ・VR動画視聴 ・立入許可証交付	・立入許可証交付 ・建屋内見学 原子炉建屋ギャラリー タービン建屋ギャラリー	ゲストホール 原子炉建屋 タービン建屋	
10:25～11:15	(50)	・建屋内見学 原子炉建屋ギャラリー タービン建屋ギャラリー	・屋外安全対策設備見学 (防潮堤他) ・VR動画視聴	ゲストホール 原子炉建屋 タービン建屋	
11:15～11:25	(10)	質疑応答 集合写真撮影		ゲストホール	
11:25		事務本館 発		正面玄関	
11:30		中央ゲート 発			
11:35		トントゥビレッジ 着			
11:40		トントゥビレッジ 出発			

参加人数　　合計２７名
　大湊高校　　１０名
　田名部高校　　１０名
　むつ養護学校　　７名



（３）東京電力福島第一原子力発電所及び福島県研修

目　的　・被災地を実際に見学することで、震災と復興について学ぶ。
　　・同地域の学びあいにより、下北地域の防災意識向上につなげる。
日　時　令和６年８月７日（水）～９日（金）
場　所　福島県双葉町、富岡町、広野町等
日　程

【１日目】

時　間		詳　細
７：２０	出発	むつ養護学校発
１４：３０	福島県 双葉町	**東日本大震災・原子力災害伝承館** 施設見学、フィールドワーク 〒979-1401　福島県双葉郡双葉町大字中野高田 39
１７：１５	見学終了	東日本大震災・原子力災害伝承館　出発

【２日目】

時　間		詳　細
９：００	福島県 富岡町 双葉町 大熊町	**東京電力廃炉資料館** **東京電力福島第一原子力発電所** 東京電力ホールディングスの社員の案内の元、福島第一原発の見学を行う
１３：００	見学終了	福島第一原子力発電所　出発
１３：３０	双葉町 昼食	**双葉町産業交流センター　到着** 昼食
１４：３０	研修	東京電力ホールディングスの社員による講話、グループワーク
１８：００	研修終了 会場発	
１８：４５	ホテル着	ホテルフレンテ広野　到着 〒979-0513　福島県双葉郡広野町大字夕筋字楢葉作63－1

【３日目】

時　間		詳　細
９：３０	福島県 浪江町	**震災遺構請戸小学校** 施設見学 〒979-1522　福島県双葉郡浪江町請戸持平56
１１：００	見学終了	請戸小学校　出発 昼食は各自準備

参加人数　　２９名
　大湊高校　　１３名
　田名部高校　１６名

（４）大湊高校　第２回防災訓練

目　的

ア　土砂災害発生時の被害を最小限にとどめるために垂直避難訓練を行う。
イ　教職員における災害発生時の緊急対応を鍛錬する。
ウ　垂直避難についての理解を深めるとともに問題・課題を明らかにする。
エ　生徒・教職員とも緊急時の対応力を身に付ける。
オ　避難までの時間より、様々な状況での対応力を身に付ける。

日　時　　令和６年８月２７日（火）　６校時実施（１４：２５～１５：１５）

諸連絡

ア　今回の避難訓練は、生徒指導部と下北 BOUSAI ネットワークが企画し実施する。
イ　学校野球場で土石流が発生したことを想定し、学校内で垂直避難を実施する。
ウ　避難場所は管理棟３階　かなり密集した状況になることが想定される。
エ　避難後の人員確認は、クラスごとに人員確認できたらその場にしゃがませる。
オ　教頭への報告は学級担任から口頭もしくはメモで行う。

計　画　　防災 NW＝（下北 BOUSAI ネットワーク担当生徒）

時　刻	内　　容
１４：１５	各クラス　プロジェクター事前準備・確認
１４：３０ １４：３５	(1) 各クラスで映像視聴（ZOOM 配信） 土砂災害について　約５分 (2) 地震発生（放送：教務部）
１４：３８	(3) 学校裏で土石流発生 これ以降の全体への指示は防災 NW で行う。
１４：４０	(4) 避難（防災 NW 誘導）１５分
１４：５５ １５：００	(5) 教室への移動　５分 (6) 振り返り　１５分

参加人数　　全校生徒　３５９名

土石流災害に備え訓練

むつ・大湊高 400人「垂直避難」

土石流災害に備えようと、むつ市の県立大湊高校で27日、校舎内で高い所に逃げる「垂直避難」の訓練が行われ、生徒と教職員計約400人が参加した。同校で土石流災害を想定した訓練を行うのは初めて。

訓練は、大湊高など下北地域の県立学校5校でつくる「下北BOUSAIネットワーク」の活動の一環で行われた。

この日は、大雨の後に地震が発生し、校舎の西側の山から土石流が迫っているとの想定で実施。生徒らは階段を上り、3階に5分ほどで避難した後、教員が生徒の安否確認を行った。

同ネットワークの一員として訓練を企画した2年の木本穂佳さん(16)は「声をかけ合ってスムーズに避難できた。土石流災害が起きた時は、自分の身を最優先で守ってほしい」と話した。

階段を上って3階に避難する生徒ら

令和６年８月２８日（水）読売新聞記事

（５）防災ワークショップおよび震災研修報告会

日　時　　令和６年９月１４日（土）
　　１３時３０分～　受付
　　１４時００分～　防災ワークショップ
　　１５時３０分～　下北管内５校合同　震災から学ぶプロジェクト報告会
場　所　　むつ市立図書館　視聴覚ホール・集会室
内　容　　ア　「防災ワークショップ」　　１４時００分～１５時３０分
　　・内容　カードゲームで学ぶ防災
　　イ　下北管内５校合同　震災から学ぶプロジェクト報告会
　　１５時４０分～
　　a　６月の岩手県宮古市田老地区研修報告　　（大湊高校）
　　b　７月の東北電力東通原子力発電所研修報告　（大湊高校）
　　c　８月の東京電力福島第一原子力発電所研修報告
　　・東京電力福島第一原子力発電所見学報告　（田名部高校）
　　・請戸小学校、原子力災害伝承館等　　（大湊高校）
　　d　研修に参加しての感想
　　・東北電力東通原子力発電所　　（むつ養護学校）
展示物　　防災関連ゲーム・日本ジオパーク全国大会での発表内容の展示
　　防災ピクトグラム、防災ゲーム　等

令和６年度前半事業の合同報告会（９月：むつ市立図書館）

防災学習ゲーム「シャッフル」を利用しての防災学習

（６）青森県防災研修センターでの防災研修

日　時　　令和６年１０月１２日（土）
　　７時３０分　　田名部高校　集合・出発
　　９時４５分　　青森県防災研修センター　到着
　　１０時００分～　防災研修
　　１２時３０分～　青森県防災研修センター　出発
　　１５時００分　　田名部高校　到着・解散
場　所　　青森県消防学校（青森県防災教育センター）
　　青森市新城字天田内１８３－３
内　容　　ア　防災講話
　　イ　防災体験（地震体験・消化体験・煙避難体験・非常食試食など）
　　ウ　避難所運営研修（避難所運営ゲーム・資材組み立て）
参加人数　　２２名
　大湊高校　　１６名
　田名部高校　　３名
　むつ工業高校　　３名

（７）日本ジオパーク全国大会　下北大会

日　時　令和６年８月３０日（金）～９月１日（日）
　　ア　８月３０日（金）１３時～１７時　物品搬入
　　イ　８月３１日（土）　８時～１７時　大会１日目
　　ウ　９月　１日（日）　８時～１７時　大会２日目
参加生徒　３３名（大湊高校）
内容・タイムスケジュール
　　８月３１日（土）

時　間	内　容	場所・その他
９時００分	下北 BN ブース開始 ①ジオピクトグラム説明 ②防災ピクトグラム説明 ③防災ゲーム	11　下北 BN 展示場
９時２０分	口頭発表　①シン・べこもちⅡ	口頭ブース１
１１時２０分	口頭発表　②下北 BN	口頭ブース２
１１時３０分	昼食（各自時間を見て）13 時まで	マエダアリーナ
１２時００分	ポスター発表（１３時終了） ①下北 BOUSAI ネットワーク ②シン・べこもちⅡ	 ポスターブース ポスターブース
１３時３０分	ユースセッション集合	マエダアリーナ
１３時４５分	ユースセッション開始	
１６時３０分	解散	

（８）大湊高校　第３回防災学習（避難訓練）

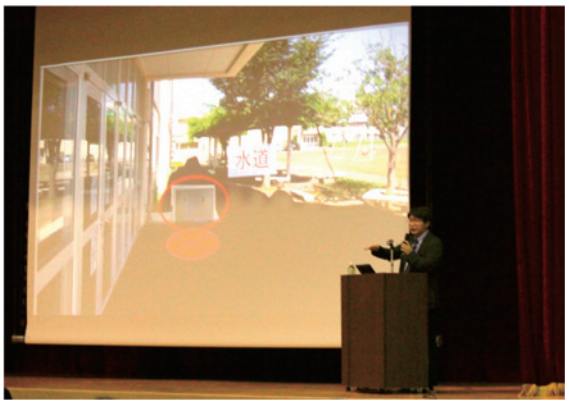
目　的　・東日本大震災の被災者体験を聞くことで防災意識を高める。
・下北 BOUSAI ネットワーク活動を知り、活動参加者を増やす。

日　時　令和６年１２月１０日（火）　１４時２５分～１５時１５分（５０分）

場　所　第一体育館

日　程　１４時２５分　開会　　東日本大震災について
１４時３０分　講演「１６歳の語り部　東日本大震災」
東日本大震災の被災体験と１３年目の被災地の現在
１５時１０分　質疑応答
１５時１５分　閉会

講　師　雁部　那由多（がんべ　なゆた）氏
１９９９年生まれ、宮城県東松島市出身。
東北大学大学院文学研究科社会学研究室　博士前期課程。
２０１１年、東松島市立大曲小学校５年生の時、東日本大震災被災。小学校で大津波に流されそうになりながら偶然にも生還した。友人の死や自宅の全壊、半年間の避難所生活と１年半にわたる仮設住宅での生活を経験している。その後、中学校２年生だった２０１４年春、初めて自身の被災体験を語りはじめた。高校１年生の２０１６年春に同級生との共著『１６歳の語り部（ポプラ社刊）』を出版し、以降語り部として自身の被災体験や住んでいた町の復旧・復興の模様を全国で伝え続けている。



6　成果と課題

岩手県宮古市や東京電力福島第一原発訪問など、様々な校外活動を通じて、生徒は防災に対する理解を深め、災害を自分事として捉えることができるようになってきている。また、ぼうさいこくたい（熊本）や日本ジオパーク全国大会など、日本各地でワークショップや研究発表をした経験が、確実に生徒の意識の高揚と学びにつながっている。今後も新しい防災学習のあり方についての研究を進めるとともに、５つの学校の連携を強化し、安全な社会づくりに貢献できる人材（生徒）を地元下北へ還元していく。

青森県立名久井農業高等学校

１　防災教育の主題・テーマ

「災害に強い名農生～農村における災害時のリーダー育成～」

　災害発生後の諸活動について学習し、知識や技術を高める。有事の際には率先して周囲に安全・安心を提供できる逞しいリーダーの育成を目指す。

テーマ１「南部町を流れる馬淵川の洪水浸水に関する防災対策について」

　　→１学年生徒を対象に保健の授業を活用して実施した。

テーマ２「農業高校の特色を生かした避難所運営訓練について」

　　→農業クラブ役員を対象に体験的な学習を実施した。

２　対象生徒

テーマ１　１学年生徒３８名

　　〔生物生産科２６名　環境システム科１２名〕

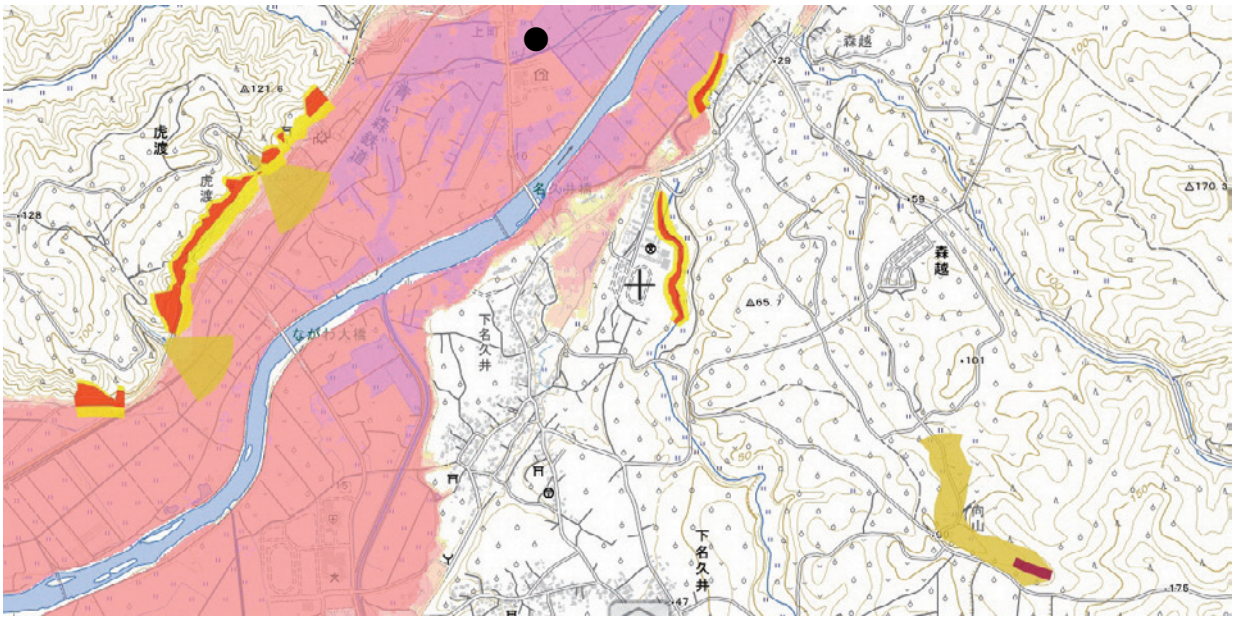
テーマ２　農業クラブ役員１３名

３　所在する地域の特徴

本校の西側約５００ｍに馬淵川が流れており、この地域は度々洪水浸水被害に遭ってきた。昭和４０年代までは本校も度重なる洪水被害に遭ってきたことから、昭和４６年に現在の場所に移転した経緯がある。現在の校舎は高台に位置しているため洪水浸水区域外となっている。ただし、本校第１農場（果樹園）や通学路、多くの生徒が暮らす南部町は洪水浸水区域内にあることから、日頃から豪雨災害に対する警戒が必要な地域である。また、本校敷地の東側は急傾斜地となっており、土砂災害警戒区域が隣接している。

本校周辺のハザードマップ（洪水浸水・土砂災害）

（＋印が現在の校舎、●印が昭和 46 年までの旧校舎の位置）



※出典「重ねるハザードマップ」（国土交通省）

＜過去の災害＞

①十勝沖地震（１９６８年5月１６日）

十勝沖地震の発生により、剣吉中学校（当時）の校舎が使用不能になる。また、この地震で、校舎から避難中に学校裏山で山崩れが発生して、生徒１１名が生き埋めになり、そのうちの４名が死亡した。また、剣吉中学校に避難した卒業生２名も、地割れに巻き込まれて死亡した。

②馬淵川の洪水の記録（南部町ホームページ参照）

剣吉観測所での最高水位は、８ｍ４３cm（昭和２２年８月）という記録が残っている。なお、平成２３年の台風１５号による剣吉観測所での最高水位は7ｍ９８cmとなっている。その時の総雨量は3日間で平均１６０mm 程度だったが、１週間前から１００mm 程度の雨が降り、馬淵川の水位が下がりきらないうちに台風１５号で雨が降った。また、平成２５年の台風１８号では１２時間で一気に雨が降り、妻の神雨量観測所では降り始めからの総雨量が１６３mm となっている。

様々な要因が絡むが、これまでの経験から馬淵川上流部（熊原川、安比川付近）で２４時間の総雨量が１６０mm 近くに達する場合注意しなければならない状況であると考える。

（本校の被害）

・平成２３年９月の台風１５号により第一農場及び野球場が２．９７ｍ冠水
・平成２５年９月の台風１８号により第一農場及び野球場が１．５０ｍ冠水

４　防災上の課題

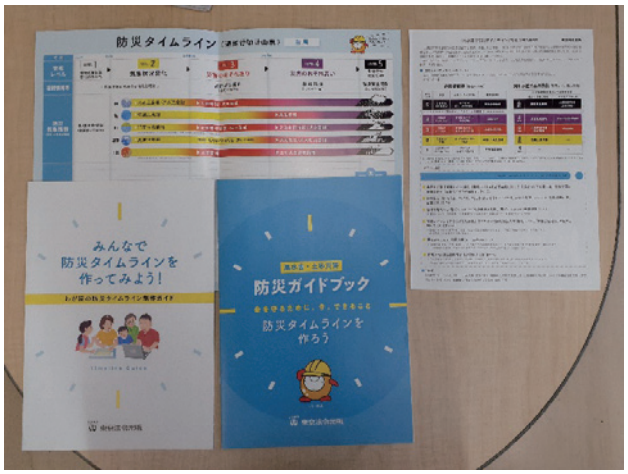
本校は「緑育心」を教育方針に掲げ、農業及び工業教育を通じて地域に貢献できる生徒を育てることを目標にしている。卒業後は地元に残る生徒が大半を占めていることから、地域の防災の担い手となる人材を育てることにより、災害発生時に地域で活躍することが期待できる。本校においては、農業クラブ活動等を通じて様々な研究に取り組み、その研究成果を各方面で発表してきたが、防災に関してはこれまで十分に取り組むことができなかった分野でもあり、本事業を通じて地域防災に貢献できる生徒の育成に取り組むこととした。

５　防災教育の取組

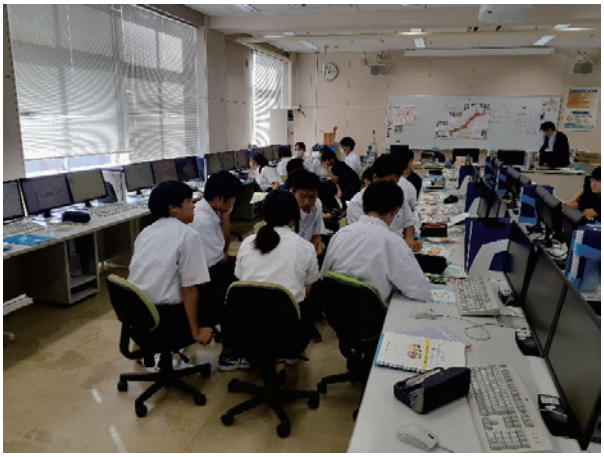
（１）外部講師を活用した防災教育

目　的　　南部町及び周辺地域の災害リスク（特に気象災害）について学習し、災害発生時に自ら命を守る行動ができる資質・能力を養う。
日　程　　令和６年９月１２日（木）５・６校時
対　象　　１学年
講　師　　東京法令出版株式会社東北支社　支社長　杉山克洋　氏
場　所　　情報処理室
教　材　　「わが家の防災タイムライン」（東京法令出版株式会社）
スケジュール

１３：２５～　自己紹介、研修の進め方説明・確認
１３：３０～　講義「最近の風水害に学ぶ～どのように対処すべきか」
　　「防災タイムラインの作成と意義」
１３：４５～　演習「マイタイムラインの作成」
１４：２０～　グループディスカッション
　・班ごとに作成したタイムラインについて発表
１５：００～　まとめ・質疑応答



教材「わが家の防災タイムライン」



グループディスカッションの様子

感想等　・どうしても自分には関係ないと思ってしまうこともあるけれども、これから何が起こるかわからないので事前にいつ誰が何をするのか計画を立てて、それを家族全員が理解していることが大切だと思いました。また、非常食や防災グッズなど避難する状況になった時に困らないよう準備し、普段から気象情報を確認することを心がけていきたいです。

・私は、防災タイムラインを通して、万が一災害が起きた時に家族とどのように連絡を交わし、土砂崩れなどが起きている時は違う場所に避難するなど、周りに流されず、自らを信じて行動していきたいです。自分の命はもちろん、周りを見ながら他の人の命も助けられるような行動をしたいです。困っている老人などがいた際も、何か手助けしてあげたいと思います。少しでも、災害で命を落とす人が減るよう努力したいです。

（２）外部講師を活用した防災訓練

目　的　　実践的な体験活動を通して、将来、地域の防災を担うことができる人材を育成すること。

日　時　　令和６年１２月２１日（土）９：００～１３：００

場　所　　本校会議室及び調理室

対　象　　農業クラブ役員、その他有志生徒（１５名）

講　師　　青森県防災士会八戸支部　立花悟　氏、松森光広　氏、馬場明子　氏

スケジュール

９：００　講話【会議室】
・想定される災害
・今回の訓練の意義

９：４５　炊事訓練（下ごしらえ）【調理室】

１０：１５　避難所設営訓練【会議室】
・本校にある物品を使用したベッド製作
・防災グッズ製作（新聞紙スリッパなど）

１２：００　炊事訓練（湯煎調理・試食）【調理室】
・本校にある食材を使用した炊事（とり味噌などの加工品）
・アルファ化米による炊飯

１３：００　後始末・終了

準備物

アイラップ（ポリ袋）	６０枚	事業費で購入
無洗米	２kg	〃
野菜など	一式	〃
アルファ化米	３０袋	南部町総務課から提供
鍋	４個	調理室から借用
皿	１６枚	〃
コンテナ	２０個程度	農場から借用
段ボール	５枚程度	一般的なもの
防災グッズ	一式	防災士会から借用

学習内容及び成果

①お湯ポチャ（アイラップを利用した湯煎調理）

（ア）目　的　①　断水時に洗い物を少なくできる。
②　電気を使わずに温かいご飯が食べられる。

（イ）材　料　紙皿、ポリ袋、米、豆乳、すりごま、ねぎ、とり味噌、おかず味噌、鶏ガラスープ、大豆ミート、ラー油

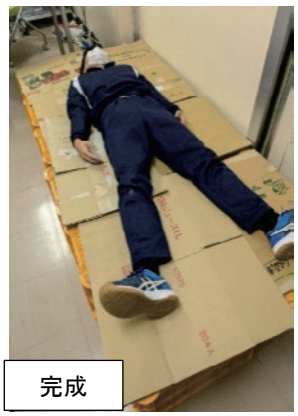
（ウ）方　法　①　ポリ袋に米以外の材料を入れて混ぜる。
②　袋を縛り、水の入った鍋で１０分蒸らす。
③　別のポリ袋に米と水を入れ２０分蒸らす。
④　紙皿にできた米と具材を盛り付ける。
⑤　完成

完成

（エ）補　足　　・米の水の分量を間違えると米が硬くなるので注意。
・蒸しパン、チャプチェも作ることができる。
（オ）今後の課題　　違う材料で調理をする。

②簡易段ボールベッドの製作

（ア）目　的　　①　避難所で床に直接寝ることを防ぐ。
②　すぐに材料を集めて、簡単に作ることができる。
（イ）材　料　　段ボール、コンテナ
（ウ）方　法　　①　コンテナを１２個並べる。
②　段ボールを敷く。
③　完成



（エ）補　足　　柵など簡単に作って取り付けるとよい。
（オ）今後の課題　　耐久性が強い組み立てを考える。

③新聞紙スリッパの作成

（ア）目　的　　①　避難先で内履きがないときの代わりとして使用する。
②　足が寒い時の防寒用具とする。
③　地震が起きた後、割れたガラスや食器などによるけがを防ぐ。
（イ）材　料　　新聞紙
（ウ）方　法　　①　手順どおり（写真①→④）に新聞紙を折る。
②　最後に中敷きとして余った新聞紙を入れる。
（エ）作成順

（オ）補　足
・新聞半分でも作れるが、薄いと破れやすくなるため、一枚で作るとよい。
・中敷きを入れないと、鋭利なものを踏んだ時にけがをするおそれがある。
（カ）今後の課題
・きれいな床で使う場合、インクが付着することがあること。

④救命用浮き具

（ア）目　的
①　身近にあるもので、災害時に水辺でライフジャケットや浮き輪の代わりに利用する。
②　緊急時、即座に役立つものを作る。
③　水に浮く原理を理解し、救命具の作り方を学ぶ。

（イ）材　料　　ペットボトル（２Ｌ）、ロープ（直径３㎜～４㎜）：長さ１０ｍほど、セロハンテープ、布テープ、砂２００ｇ又は水２００ml、キリ又は電動ドリル

（ウ）方　法
①　３本のペットボトルを、セロハンテープで仮留めする。
②　ロープを適当な長さに切り出し、胴体部分２か所と飲み口の下を本結び（又は片結び）で縛り、３本を連結する。
③　ロープから６０cm ほどを目安に切り出し、②で飲み口の下に縛ったロープの２か所に結び固定する。
④　キリやドリルを使って、残ったペットボトル１本のキャップと底部分にロープが通るように穴をあける。
⑤　ロープを、キャップの穴→ペットボトル内→ペットボトルの底の順に通したら、ロープが抜けないように端に結び目をつくる。
⑥　ロープのキャップ側の端を③で固定したロープに結ぶ。残ったロープを④のペットボトルの中に入れておく。
⑦　連結したペットボトルの真ん中の１本に、重りとして水や砂を入れる。
⑧　３本のペットボトルが目立つように、胴部分に布テープを貼り完成。

（エ）補　足
ロープの結び具合が弱いと、引っ張ったとき等にほどける可能性があるため、ペットボトルが潰れない程度に結ぶ。

（オ）今後の課題
浮き具のロープの結び方のうち、本結びなどの分からない結び方があったため、結び方の練習を行っておく。

⑤メスティンを用いた非常食

（ア）目　的　　①　災害時に簡単においしい料理を作る。
②　身近にあるもので即時に作ることができる。

（イ）材　料　　メスティン、無洗米、水、焼き鳥缶、固形燃料、クッキングシート

（ウ）方　法　　①　メスティンの形に沿ってクッキングシートに折り目をつける。
②　メスティンの中に無洗米と水を入れる。
③　固形燃料を設置し、火をつけその上にメスティンを置く。

④　２０分経ったら取り出し、タオルで蒸す。
⑤　完成

（エ）補　足　　固体燃料が切れるまで炊き、蒸し上げる。
（オ）今後の課題　　クッキングシートの折り目でこぼれてしまうので強化をする。

⑥缶詰を使用したランプ製作

（ア）目　的
①　ライトのバッテリーが無くなった時の代替品とする。
②　食品に火を通すことで災害時に温かいものを食べられるようにする。
③　香ばしい匂いによる食欲の増進を図る。

（イ）材　料　　ツナ缶などの油の多い缶詰、ティッシュペーパー、火器（マッチ、ライター）、缶切り（釘など缶に穴をあけられる物）

（ウ）方　法
①　必要な物を用意する。
②　缶の開け口ではない側に穴をあける。
③　穴に太さ５～８㎜ の太さに丸めたティッシュペーパーを差し込み油が染みこむまで待つ。
④　ティッシュペーパーに火を点ける。
⑤　火が消えるまで待つ。
⑥　火が消えたら食べる。

（エ）補　足　　・油が少ないと火が点きにくいことがある。
・端でやると火の通りに偏りが出てくることがある。

（オ）今後の課題　　・ティッシュペーパーをアルミホイルで巻いてもよい。

⑦サラダオイルランタン（空き缶）

（ア）目　的　　①　あかりを灯すことで気持ちを安心させる。
②　暖代わりとしても使用できる。

（イ）材　料　　アルミ缶、マジックペン、ティッシュペーパー、アルミホイル、キリ、カッター、サラダ油

（ウ）方　法

①　直径６㎜くらいの灯心用の穴をキリであけて、逆U字型にカッターで切り取る。 	②　灯心を入れる穴部分を内側に折り曲げる。 ③　ティッシュペーパーを５cm 幅に切り、直径５㎜くらいになるように丸める。 	④　幅３cmくらいのアルミホイルを中央に２回巻き、灯心の完成。 ⑤　灯心を灯心穴に入れ、サラダ油を底から２cmくらいまで入れる。灯心の上部まで油がしみてきたら火を点ける。

（エ）補　足

・アルミ缶は軽くて倒れやすいため、中に入っているサラダ油で火傷をしないように気をつける。
・灯心が缶の中にあり、風に強く火力も強いため３つほど作って上に鍋を置くとお湯を沸かすことも可能。

（オ）今後の課題

・もう少し大きく穴をあける。
・倒れやすいため、土台を工夫する必要がある。

完成

⑧簡易トイレの製作

（ア）目　的

①　避難所で水洗トイレが使用できなくなった時、利用できるための対処法。
②　衛生面も考慮して安全なトイレを作る。

（イ）材　料　　椅子、段ボール、カッター、ポリ袋、発泡スチロール、砂、ガムテープ、ドリル

（ウ）方　法

①　椅子の座面のねじを、ドリルで除去する。
②　骨組みに断熱用の発泡スチロールを、取り付ける。
③　用意した段ボールを、ガムテープで補強する。
④　③で加工した段ボールの中に、砂を入れる。
⑤　骨組みの下に、③の段ボールを入れる。
⑥　完成

（エ）補　足

・用を足すときにポンチョなどもあるとよい。

（オ）今後の課題

・どの年代の人も安心して用を足せるようにする。

（３）学習成果を発表（アウトプット）する活動

「多賀城高校 3.11 メモリアル“Re-Dit”ミーティング」への参加

１　目的

（１）東日本大震災の経験と教訓を全国各地・後世に継承し、全国の高校生が自分の地元地域の防災・減災に関する問題を焦点化し、自分事とするきっかけをつくる。

（２）各校が係る取組の探究活動成果について発表・議論し合うことで、参加校生徒の探究力・議論力・統合力の向上を図り、国内外の防災・減災に寄与・貢献する人材育成を目的とする。

２　主管

主催：宮城県多賀城高等学校　　後援：宮城県教育委員会

協力：東北大学災害科学国際研究所、多賀城ロータリークラブ

３　日程

令和７年１月３１日（金）～令和７年２月１日（土）

４　会場

宮城県多賀城高等学校　iRis Hall　他

５　対象

全国の防災教育先進高等学校

６　内容

（１）講演会

演題　「公助」から考える自助・共助～「伝災」が次の防災減災を生む～

講師　東北地方整備局　企画部　企画課長補佐　日野口　厳

・共助・公助について、東日本大震災前後の変化について事例を学習した。

・普段考えることがなかった当たり前の対義語について考察し、有り難きものであることを理解した。

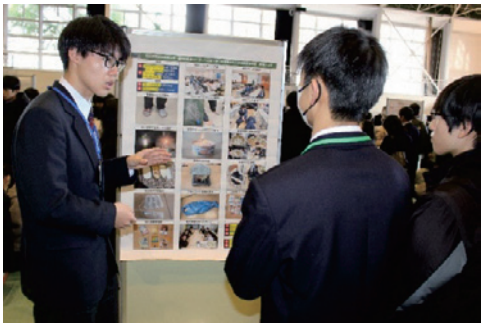
・過去の災害を見ても勤務時間内での発生は稀であることから、起こるものとして備えることが基本であることを学習した。

（２）グループワーク

・自助・共助・公助の関係を踏まえて、平常時、発災直後、復旧・復興に必要な備えについて話し合いを行った。

（３）学校案内・交流会

・校舎内で津波被害を受けた浸水箇所の確認、仮設住宅を案内していただいた。



（４）ポスターセッション

・１年間の活動をポスターにまとめ、活動内容を発表した。他校の発表も見学し、相互に意見交換ができた。

（５）防災備蓄倉庫

・生徒会館の中にある備蓄倉庫を見学させていただいた。１日分の食料の他に、石けんや消毒液、洗剤などの衛生用品やカイロやブランケットなど暖房用品も必要なことが分かった。

（６）津波伝承まち歩きスタディツアー

・多賀城高校の生徒から、市内の津波被害区域の詳細を学んだ。複雑な地形であることから単に海から遠くへ逃げるだけでは避難できないことが分かった。

６　本事業で得られた成果（◎）及び課題（◆）

（１）生徒

◎本校が所在する南部町で想定される自然災害について学習したことによって、災害を自分事として考えることができるようになり、災害発生時において主体的に行動できる資質を身に付けることができた。

◎本校にある物品を活用した防災グッズ製作や加工品を活用した防災調理を体験したことにより、その他の実習においても自ら創意工夫する態度を身に付けることができた。

◆今年度は農業クラブ役員を中心に防災教育に取り組んだが、次年度以降は農業クラブ役員を中心に全校生徒に防災教育の取組を波及させ、学校全体で防災について学び、将来的に地域で防災リーダーを担うことができる資質能力を身に付けていくことが課題である。

（２）教職員

◎複数の教職員が、それぞれの担当教科や得意分野の特性を活かし、連携して防災教育に取り組むことができた。

◎１０月の県教委主催の視察研修、外部講師の活用などを通じて、先進的な防災教育の取組や専門的な知識等に触れることによって、防災教育に関する研鑽を積むことができた。

◆次年度以降も持続可能な取組にするため、より多くの教職員を巻き込んで、組織的に防災教育を進めていく体制づくりが課題である。

（３）地域

◎南部町や青森県防災士会八戸支部の協力を得て、体験的な防災教育を実施できたことから、今後も関係機関と連携しながら防災教育に取り組むための連携体制を構築することができた。

◆地元の幼保小中学校と協働した取組について、南部町と連携しながら機会を設けていきたい。特に、本校は農業体験などを近隣の学校等と行っている実績もあることから、そうした既存の取組と防災教育をつなげて実施できるよう関係機関との協力を図ることが課題である。

青森県立青森工業高等学校

１　防災教育の主題・テーマ

学校近くを流れる野内川の洪水浸水に関する防災対策・避難所運営演習を基軸に、将来的に地域防災の担い手となれる人材や、地域の防災活動に参加し、安全な社会づくりに貢献できる人材を育成する。

２　対象生徒

生徒会防災委員会３６名（各ホームルーム２名×６クラス×３学年）

３　所在する地域の特徴

青森工業高等学校は、青森市の東部「馬屋尻地区」に位置する。本校北西方向には青い森鉄道「野内駅」と青森市営バス東部営業所があり、南東方向には国道４号線が走る。南西部に野内川、北東部に貴船川が流れており、両河川に挟まれた場所に所在する。青森市洪水ハザードマップによると、本校は馬屋尻地区の浸水区域内指定緊急避難場所及び指定一般避難所となっている。

４　防災上の課題

（１）防災教育について

これまでの防災教育の主な場面は、火災・地震・水害（垂直避難）を想定した年３回の避難訓練とホームルーム活動のみである。特に避難訓練は、避難ルートの確認と避難後の人員掌握といった形骸化したものになっている。

また、本校には、各ホームルームから選出された２名により構成される生徒会防災委員会があるが、その任務は、避難誘導の際に各ホームルームの先頭と最後尾について避難して、避難完了後に人数を担任に報告するだけという単純なものである。

（２）災害発生時の危機管理・避難について

毎年、避難確保計画（水害・洪水）を策定し、青森市へ届け出るとともに、他の災害等を含め、本校の危機管理マニュアルとして作成してはいるものの、近年本校周辺において水害等の大きな災害が発生していないということもあり、災害への備えに対する意識の低さが窺える。

また、計画の中で水害（洪水）発生後の立ち退き避難（水平避難）場所として、新青森県総合運動公園や東陽小学校を計画しているものの、実際に避難路の確認や水平避難の訓練が行われていないため、生徒を含め、ほとんど知られていないのが実状である。

５　防災教育の取組

（１）施設見学・体験「青森県防災教育センター」

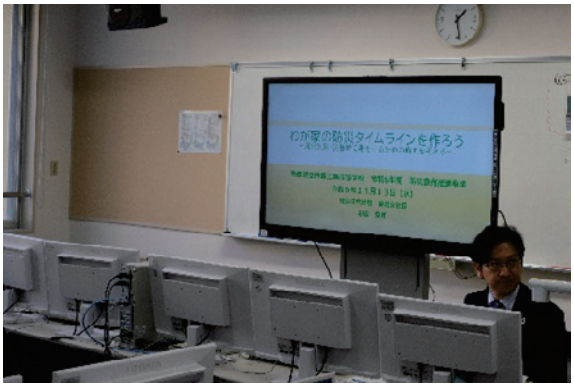
日　時　　令和６年９月２７日（金）１３：００～１６：３０
場　所　　青森県防災教育センター（青森市）
ねらい　　防災・災害に関する知見を深める。
講　師　　青森県消防学校副校長・青森県防災教育センター職員
対　象　　生徒会防災委員３６名
内　容　　副校長講話、防災ＤＶＤ視聴、地震体験、消火体験、煙避難体験
感　想　　センター見学を通して、災害時に自分の身を守るために大事なことを体験的に楽しく学ぶことができた。また、通常の見学とは別に県内の自主防災組織や災害時の避難所運営を担う方などを対象とした「防災研修」を開催しているとのことで、次年度、本校防災委員の参加を検討している。「自分たちの地域は自分たちで守る！」そのための備え、いざという時の行動を学ぶ良いきっかけとなった。

（２）出前トーク「防災対策～災害への日頃の備え～」

日　時　　令和６年１０月８日（火）５・６校時（１３：３０～１５：２０）
場　所　　本校視聴覚室
ねらい　　全国的に地震や台風による被害が続く中、一人一人が実施すべき災害への日頃の備え、災害別の避難行動、災害発生時の対応について知る。
講　師　　青森県危機管理局防災危機管理課　主幹　若山　真紀子　氏
対　象　　生徒会防災委員３６名
内　容　　災害の種類、防災（減災）対策、自助・共助・公助のつながり、あおもりおまもり手帳についての講話とハザードマップを使った避難行動演習
感　想　　本校では南西部を流れる野内川の洪水・氾濫に伴う浸水を想定した防災教育のテーマを設定していたが、若山主幹のお話から、北東部を流れる貴船川の過去の浸水被害、氾濫想定を知ることができた。また、気象情報等の具体的な収集手段や非常持出品の備え、大雨・洪水時、台風時の避難の心得、災害時のトイレの重要性など、講話と演習を通して防災に関連する基礎的な知識と技術、適切に意思決定し、行動するために必要な力を身に付けるきっかけを得ることができたとても充実した内容であった。

（３）講義・演習「わが家の防災タイムラインを作ろう」

日　時　　令和６年１１月１３日（水）５・６校時（１３：３０～１５：２０）
場　所　　本校情報技術基礎実習室
ねらい　　「防災タイムライン」の作成演習を通して、いざというときに慌てずに行動するための準備、逃げ遅れを防ぎ、風水害から身を守る術を体験的に学習することをねらいとした。
講　師　　東京法令出版株式会社営業部　東北支社長　杉山　克洋　氏
対　象　　生徒会防災委員３６名
内　容　　東京法令出版株式会社発行の「わが家の防災タイムライン」キットを活用して、青い森鉄道「野内駅周辺」に居住している６人家族が風水害に見舞われたことを想定した防災タイムライン作成の演習を行った。
感　想　　「防災タイムライン」は、災害に対し、「いつ」「だれが」「何をするのか」をあらかじめ決めておく事前の「防災行動計画」であり、特に、台風などの風水害は事前に予測できるので、避難に備えて準備することができることがわかった。演習を通して、自分事として捉え、風水害が発生する前に慌てずに行動するための準備について考えることができ、風水害から身を守る術を学ぶ良い機会となった。



（４）講義・演習「実践的な避難行動について学ぶ」

日　時　　令和６年１１月２６日（火）５・６校時（１３：３０～１５：２０）
場　所　　本校視聴覚室
ねらい　　本事業にも参加し、先進的な取組をしている下北 BOUSAI ネットワーク（下北管内５校合同プロジェクト）の取組について講義・演習を通して体験的に学び、本校における防災教育推進に関する様々なヒントを得ることをねらいとした。
講　師　　下北 BOUSAI ネットワーク（県立大湊高校）栗林　　月　氏
対　象　　生徒会防災委員３６名
内　容　　講義「あなたならどうする？～避難時に必要なこと～」
　　演習「減災アクションゲーム・避難行動ゲーム」

感　想　　県立大湊高校の栗林先生から下北 BOUSAI ネットワークの取組紹介と実践的な避難行動についての講義及び減災アクション・避難行動ゲームを通して体験的に楽しく学ぶことができた。講義中「あなたならどうする？」という問いを投げかけられると、自然と自分事として考えることができ、有意義な時間となった。また、講義・演習に先立って、次回の「炊き出し訓練」の予行を兼ねて水又はお湯を注ぐだけの非常食「アルファ化米」の試作・試食も行った。

（５）演習「全校生徒・教職員を被災者と想定した炊き出し訓練」

日　時　　令和６年１２月２３日（月）９：００～１２：３０

場　所　　本校多目的室

ねらい　　全校生徒・教職員合わせて約６００人を被災者と想定した炊き出し訓練を行い、災害時における調理の進め方や、そうした環境下での被災者の食事摂取のシミュレーションを行うことをねらいとした。

協　力　　防衛省自衛隊青森地方協力本部青森募集案内所隊員７名

対　象　　生徒会防災委員３６名

内　容　　お湯又は水を注ぐだけのアルファ化米（アレルギー対応五目ご飯）６００食を使い、学科ごとの防災委員グループで、それぞれ１００食分（６学科×１００食＝６００食）を用意し、全校生徒・教職員に配り実食する。

感　想　　防衛省自衛隊青森地方協力本部青森募集案内所の支援・協力をいただき、全校生徒・教職員約６００人を被災者と想定した炊き出し訓練を行った。災害時における調理の進め方、食中毒対策、配給、食事摂取までのシミュレーションができた。また、実際に活躍している防衛省自衛隊の装備品（炊事車両）の展示や戦闘糧食の試食、実際にあった災害派遣時の様々な経験談も隊員の方から伺うことができて貴重な時間となった。

（６）演習「防災意識を高める効果的な避難訓練」

日　時　　令和７年１月１４日（火）６校時（１４：３０～１５：１５）

場　所　　本校第一体育館

ねらい　　形骸化しているこれまでの避難訓練を生徒目線で見直し、全校生徒・教職員一人一人の防災意識を高めることができる効果的な避難訓練及び防災教育を行うことをねらいとする。

協　力　　防衛省自衛隊青森地方協力本部青森募集案内所隊員

対　象　　全校生徒・教職員

内　容　　大雪の中、大地震が発生したことを想定し、第一体育館へ避難。

避難完了後、防衛省自衛隊員による「東日本大震災等の自衛隊が保有する震災経験の伝承による防災意識の醸成」と「救護組織が到着するまでに実施できる止血法や傷病者の搬送法等の教育」の講義・演習

感　想　　全校生徒・教職員約６００人が避難完了し、防衛省自衛隊青森地方協力本部青森募集案内所の支援・協力をいただいて震度６強の地震とはどのようなものなのか、映像とともに地震発生後の対処・諸注意についてお話しいただいた。次にタオルを使った圧迫止血、緊迫止血、負傷者の搬送法三種類を実際に自衛隊員のデモンストレーションを交えてご指導いただいた。今後、形骸化している現在の避難訓練を生徒目線で見直し、防災意識を高める効果的な避難訓練を考える良いきっかけとなった。

（７）講演「３．１１を学びに変える」－地震と津波が“奪った”もの“残した”もの－

日　時　　令和７年１月１５日（水）５・６校時（１３：３０～１５：２０）
場　所　　本校視聴覚室
ねらい　　東日本大震災の被災体験を聴き、自分事として捉え、防災・減災意識を高めることをねらいとする。
講　師　　東北大学大学院文学研究科社会学専攻分野博士前期課程
　　雁部　那由多（がんべ　なゆた）氏
対　象　　本校生徒防災委員３６名＋聴講を希望する教職員
内　容　　東日本大震災の被災体験の講話
感　想　　宮城県東松島市大曲小学校５年の時に東日本大震災で被災し、語り部として活動する雁部さんからお話を伺い、学校の玄関先で津波に襲われたこと、避難所での生活や人と人との関係性の変化、大人達の表情が消えていったこと等、私たちが過去の映像からでは知ることのできない貴重な情報を知ることができた。そして、私たちの未来のために生かせるたくさんのヒントと行動に踏み出す勇気を得ることができた。

６　成果と課題

・　今年度の防災教育の取組によって、生徒会防災委員の生徒達の防災意識の高揚が振り返りシート等から窺い知ることができた。防災教育で得られた知見を自分事として捉え、具体的な行動に移すことができるかが今後の課題である。
・　防衛省自衛隊の支援・協力により、これまでの避難訓練とは異なった内容のものを実施することができた。今後、既存の避難訓練について生徒による見直しを行い、これまでの防災教育で得た経験や知識を生かして、充実した避難訓練をプロデュースすることができるようにしたい。
・　青森県防災ハンドブック「あおもりおまもり手帳」を活用して火災・地震・風水害など該当するページを抜粋・印刷したものを避難訓練前に各ホームルームに掲示し、生徒達の防災意識の高揚を図るきっかけをつくることができた。今後、防災委員が防災リーダーとなり、全校生徒、あるいは地域社会で防災に関する知識や防災意識を高められる具体的な活動ができるよう取組を進めたい。
・　次年度も引き続き保護者や地域住民の皆さんと連携した避難所開設の訓練や炊き出し訓練を計画し、実行するなど生徒達が具体的な行動ができる場面を増やしてみたい。

■講義・演習「わが家の防災タイムラインを作ろう」
令和６年 11 月 13 日水曜日　ＲＡＢ青森放送「ＲＡＢニュースレーダー」で紹介
https://news.ntv.co.jp/n/rab/category/society/ra69db751d9a304b0dbd76bda879a01f83

■講義・演習「実践的な避難行動について学ぶ」
令和６年 11 月 26 日火曜日　ＡＢＡ青森朝日放送「ハレのちあした」で紹介
https://www.aba-net.com/news/news-131979.html

■講演「３．１１を学びに変える」－地震と津波が“奪った”もの“残した”ものー
令和７年１月 17 日金曜日　河北新報社「河北新報－朝刊」で紹介

■本校ホームページでは、随時、取組を紹介しております。
青森県立青森工業高等学校ホームページ【全日制－活動の様子】
https://www.aomori-th.asn.ed.jp/

高等学校における防災教育推進事業
令和６年度実践記録集

令和７年３月発行
青森県教育庁スポーツ健康課

住所 〒０３０－８５４０　青森市長島１丁目１番１号
TEL　０１７－７３４－９９０８
FAX　０１７－７３４－８２７５